

石ノ森萬画館を訪ねて



3.11 以降～東北の文化を考える～

お人形さまを訪ねて



遅ればせながら先達に倣(なら)って

3.11以降何度か東北を訪ねました。ある時、急に、井上ひさし『吉里吉里人』が頭に浮かびました。この上なく真面目に、どこまでもアホらしく、滑稽に、東北の小さな寒村が突然独立国宣言をしたことから始まる、悲しくも愉しく考えさせられる物語です。私はいつか心の中で「ここは独立国だったのだ!」と妙に納得していたのです。

吉里吉里国から山田線に乗って半島を横切るようにトンネルを出ると、美しい大槌湾に浮かぶひょっこりひょうたん島(蓬莱島がモデル)が見えてきます。今、毎日放映されている某自動車会社のコマーシャル…秀吉のタケシ、利休の鶴瓶、信長のキムタクがひょうたん島を目の前にして歌い出します。「苦しいこともあるだろさ 悲しいこともあるだろさ 泣くのはいやだ笑ちゃお〜」大統領ドン・ガバチョたちも揃って合唱です。「進め ひょっこりひょうたん島 ひょっこりひょうたん島」

覚えているでしょうか?騒がしく、おかしく、勝手仕放題の物語の始まりは、とても悲しかったことを。ひょうたん島に遠足にきた子供たちが火山の噴火に巻き込まれ全員死んでしまった、死後の世界の物語。ひょうたん島が漂流して、子供たちだけでユートピアを作ろうとする、健気で悲しい世界が舞台だったことを。

この度の大津波で、小さな丘にあった灯台や弁財天さまは流されて、ひょうたん島は1mも沈んでしまいました。それでも今日も元気な歌声が…。

日本の国を構成してきた基本の文化に思いを馳せると、特に弥生、古墳、明治以降の文化は渡来文化にあおられて成立しています。東北の三内丸山が代表する縄文文化のみが、一万年もの長きにわたり列島の風土に育まれて成熟した、私たちの分母をなす文化なのではないでしょうか。

東北に燦然と栄えた藤原三代は、平家から半世紀、鎌倉より100年早くに武家政治、幕府を開いていました。しかし、三代の祀られている金色堂のある中尊寺は、縄文の心を表わすかのように、人々のためだけではなく、鳥や獣や魚、この大地に棲む全ての魂の供養を行っていました。

東北は、透明な光の詩人・宮澤賢治が、いま大人気の漫画家・鳥パンが生まれ育ったところでもあります。歌人・西行、俳人・芭蕉、民俗学者・柳田国男と、西の先達たちは何故か北へ北へと陸奥の小径をたどっていました。東北はその昔から、心の故郷、ユートピアだったのかもしれない。



ひょっこりひょうたん島

私たちも先達のお裾分けをもらいに、遅ればせながら東北への旅を始めました。未曾有の大災害からすでに2年余りの月日が経過しても、未だ立ち往生しています。この状況を説明できる的確な言説、100年後の人々が納得できる言葉は見つかっていません。東北学の赤坂憲雄氏は、鴨長明『方丈記』は災害の30年後に書かれたテキストと指摘しています。

3.11を超えて豊かな東北を創造するためには、東北の文化に根ざした新しい思想が醸成され、そこから、街や都市の風景、産業の育成がスタートしなければと思います。

aacaはそれに力となる技術と理念を持ち合わせています。今ここで、共に考え、共に創ることが出来ればと心より願って、この『3.11以降～東北の文化を考える～』ページを始めることにいたします。

情報文化委員会
委員長 坂上直哉

*2013.11にaacaの一般社団法人移行に伴い、訪問時の「情報文化委員会」は「調査研究委員会情報文化部会」に名称が変更となりました。文中は訪問時の名称をそのまま使用しています。

目次

◎巻頭			
遅ればせながら先達に倣(なら)って	坂上直哉	2
1. 石巻市訪問			
石ノ森萬画館復興に何を見る	高橋圭太郎	6
雄 勝	立松直樹	10
雄勝スレートの現状について	木下哲人	12
伊去波夜和氣命神社を訪ねて	露口典子	14
2. 田村市～いわき市訪問			
213.4.27～28福島を訪ねて	吉野ヨシ子	18
3.11被災地への訪問	政田俊夫	20
お人形様に会いに行った	日高單也	23
お人形様～福島の花と影	南三一郎	24
境のカミと千本サクラ	坂上直哉	25
3.11以降・原子力事故後を考える	高橋圭太郎	28
お人形様衣替えツアー紀行	七字祐介	29
この国の美を形に	露口典子	32
久之浜大久地区まちづくりサポートチームの活動	栗田祥弘	34

1.石巻市訪問



賑わう萬画館内



萬画館(訪問時)

訪問日:2012年11月25日(日)26日(月)

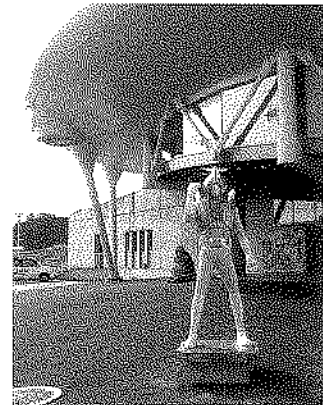
訪問先:

- ・石巻市役所 産業部商工観光課 高橋章弘様(主幹) 熱海照郎様(主査)
- ・石ノ森萬画館 (株)街づくりまんぼう 木村仁様(執行役員)
- ・雄 勝 (有)四倉製瓦工業所 四倉年思也様(代表取締役社長)
- ・伊去波夜和氣命神社 大國龍笙様(宮司)
- ・株式会社日本設計 黒木正郎様(プロジェクト総括本部代表アーキテクト)

参加者:坂上直哉、露口典子、高橋圭太郎、立松直樹、木下哲人



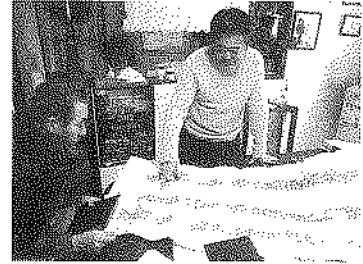
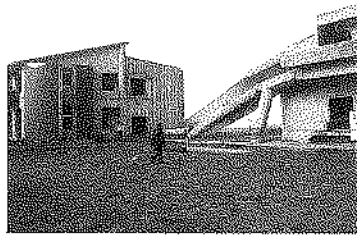
シージェッター海斗と一緒に



萬画館正面

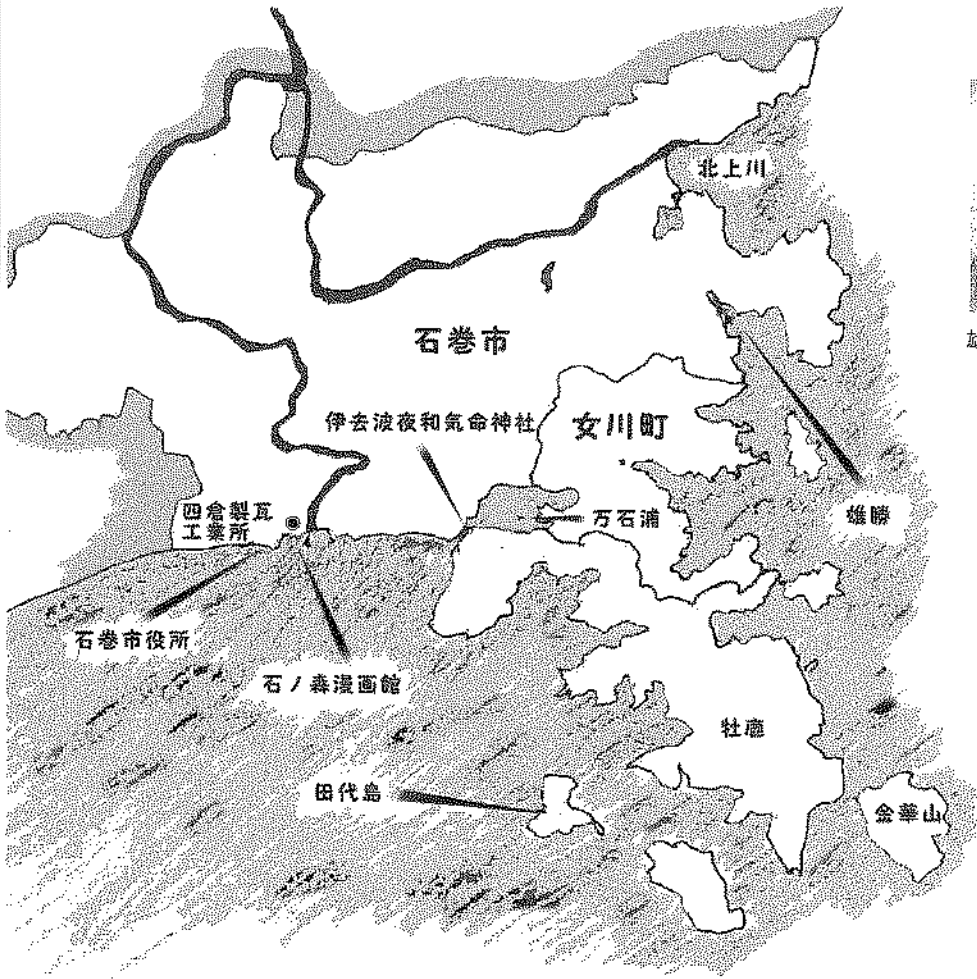


マンガロード



大川小学校にて冥福を祈る

東京駅に使用された雄勝石の説明を受ける



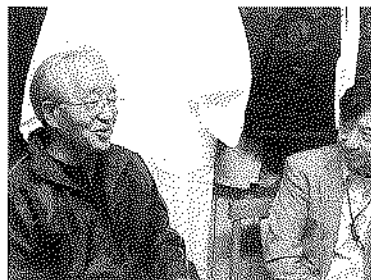
雄勝スレートの石目に沿って割る



四倉社長のレクチャー



津波に耐えた伊去波夜和氣命神社



大國宮司と語る



津波のエネルギーを知る

1.はじめに

私達に出来る事

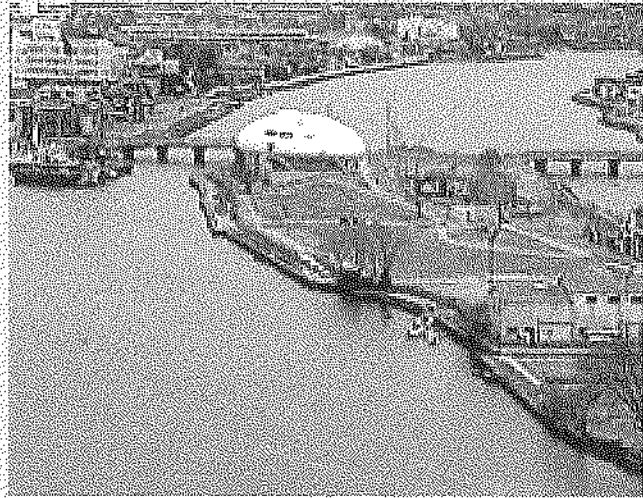
東日本大震災から1年余りの2012年6月…、日本建築美術工芸協会(aaca)情報文化委員会では、「復興支援」をテーマに議論が成されていました。それは、「私達に何ができるのか?」、「支援といっても何が求められているのか?」改めて我々、個人個人の立ち位置や協会の活動を再確認する作業でもありました。

「会員企業への訪問を行いメールマガジンにて紹介する…」など、これまでの活動を広げて「私達、独自の目線で実状を見極め、何を感じるか、何が必要なか…を模索してみよう…」との一致をみました。取分け、今回のような千年に一度と云われる激甚災害の直後には、衣食住とインフラ整備が復興の最優先とされる中、「集客目的の建築や文化を継承するモノに対しての修復や保全是後回しとされている」「本来、一番大切なはずの被災当事者達の心のケアや生きることへの希望を見せる活動は遅れているのではないか?」などの意見が交わされました。

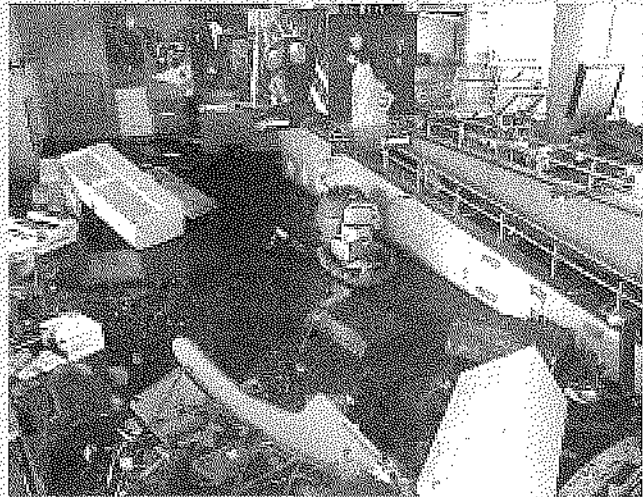
瓦礫の山といつ終わるとも判らない余震。津波の恐怖に加えて放射能の恐れまでが囁かれる現地。ともすると殺伐となりがちな被災地の老若男女の心を癒すことが、今こそ求められている。“心の復興”に目を向け、共感できる活動にフォーカスし、広く世の中に紹介していく事こそが…“文化的支援”として我々ができる活動ではないのか…という結論が徐々に見えてきました。

そうした中、テレビCMやマスコミ媒体から目にしてきた一つの建築に注目するようになりました。それが『石ノ森萬画館』です。

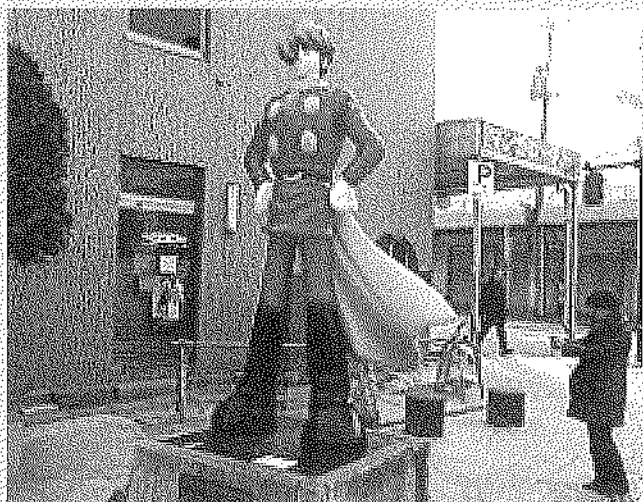
“萬画館”は、宮城県石巻市内を流れる



萬画館(訪問時)



被災直後の萬画館内部



石巻市のメインストリートである、マンガロードには、石ノ森作品のヒーロー達がオブジェとして立ち並び、街をあげての演出が施されている。

旧北上川・中瀬に位置し、石ノ森章太郎氏の作品をテーマに、石巻市と支援する市民の手により 2001 年に開館した、文字通りの市民参加型の地域活性化を目的とした施設です。地域再生を標榜したシンボリック施設として計画され、開業以来、年間約 20 万人もの来訪者を迎える施設として独自の街おこしを進めてきました。

それは、衰退著しい全国の地方都市が抱える過疎化や高齢化の問題に挑戦する新しい試みであり、「マンガ」というサブカルチャーで果たして街が豊かになるのか？といった社会に対する大なる挑戦でもあったようです。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。『石ノ森萬画館』は、突如発生した東日本大震災により生じた巨大な津波を受けて被災。その一階部分は浸水し大きな被害を受けました。と同時に、津波によって流されてきた約 40 名もの人達が 5 日間、施設内で耐え忍ぶことができた優れた防災機能を発揮する事となりました。

その後、休館中も全国から多くのファンの方々が訪れ、仮設フェンスには多くの励ましのメッセージや寄せ書きが成された事でも有名となりました。

2012 年 4 月初旬。初めてこの場所を訪れた時には、まだ肌寒く、重いダークグレーの雨雲が空一面を塗りつぶしていました。何も無くなってしまった中州に取り残されたように、雨に濡れた橋円の館は無機質で重苦しく、人気の無い寂しさの塊の様に映ります。昔読んだマンガに出てくる秘密の研究所の様でもあり、廃墟のようでもあり…ただ、それが以前、建築誌で目にした『石ノ森萬画館』であり、昨今の報道等で見覚えのある建物であるとの理解ができました。

仮面ライダーやサイボーグ 009 の作者として、絶大な知名度を誇る石ノ森章太郎氏。石ノ森章太郎氏の描く世界には、「自然と科学」、「人間と戦争」などの普遍的命題があり、人類の過剰なま

での発展と、その裏側に潜む危険への警鐘がたびたびテーマとして描かれていました。そんな作家へ思い出と、目の前の風景に符合する一遍の奇譚な暗示的遺言が、突然、脳裏に蘇ってきました。

その話は、「核戦争の末、放射能によって汚染され困窮した未来の人類が、タイムマシンを作り、現代にやって来て永住を巡って争いになる…」という、「サイボーグ 009」に描かれていた、なんともリアルで笑えない SF 作品です。

被災した石巻に見た、『石ノ森萬画館』に触発され、肌で感じた事…それは、今回の震災で大問題と成った原子力事故や被災し多くのモノを失い、避難所に集まる多くの方々の姿と重なって見えてきたのでした。

2.現地にて

2012 年 11 月 17 日。『石ノ森萬画館』は、文部科学省からの 6 億円あまりの復旧予算と多くの寄付金を集め、再オープンを迎えました。震災復興を印象づける「象徴的施設」としてクローズアップされ、NHKを始め全国ネットの大きな話題となったのは記憶に新しいところです。情報文化委員会では、まずは現地を訪れて関係者の皆さんにお話を伺おうと、2012 年 11 月 25・26 日、再オープン間もない石ノ森萬画館と石巻市役所を取材訪問する事となりました。

萬画館を運営する「株式会社 街づくりまんぼう」執行役員の木村 仁氏。宮城県石巻市産業部商工観光課高橋章弘氏・熱海照郎氏にお会いし、『石ノ森萬画館』が出来るまでの経緯や、震災から今日まで「萬画館」を取り巻く環境などのお話をお伺いしてきました。

■「株式会社 街づくりまんぼう」執行役員統括部長木村 仁氏に伺う



木村 仁 様



再オープン当日の萬画館(2枚)

そもそも、1995 年頃に石ノ森先生が視察で石巻を訪問したことをきっかけに、市民が中心となって「マンガを活かした街おこし」がスタート。当時から過疎化が進む石巻市をなんとか活性化させるには…と考えた地元の若手が集まって始めたのが原点でした。1997 年頃には「地元の民話をマンガで伝える会」という会が設立され、地域の方たちが自分達でマンガを街づくりに活かそう…と大変な努力をされて、「マンガランド構想をみんなで立ち上げ広げる会」や、さらに持ち込みカフェ「墨汁一滴」を開店。石ノ森先生をはじめとする大勢の漫画家の先生方の協力のもと運営してきました。

石ノ森章太郎先生とのご縁は、当時の日本製紙の工場長が宮城県出身でもある石ノ森先生を工場に招いて、マンガ本になる原紙の生産量日本一の工場をご紹介します…といった企画から始まったそうです。当時の市長である、菅

原康平市長と石ノ森先生との交流も始まり、機運が高まったところで、萬画館建設の話が具体化し、運営会社"TM O街づくりまんぼう"の設立へと話が進みました。

2001年の開館から10年。年間約20万人の観光客を呼ぶ人気の施設となりました。萬画館の目的は、石ノ森作品の原画の収蔵と展示に加え、社会教育を目的とした人材育成の場、地域活性化と産業振興です。マンガの真価が問われる…という側面もあり、マンガで人が呼べるのか？マンガで街に再び賑わいを取り戻せるのか？開館からしばらくは、上手くいっているのか？いないのか？それすらわからない様な手探りのスタートでした。

"街づくりまんぼう"は株式会社として設立されており、株主は市民が3000万円、市が3000万円の持ち株で、一口五万円の株を市民の皆様にかけています。

配当は一度も行えていないのですが、「街を活性化させることが配当です。」と胸を張って言えるように頑張ってきました。それも、市と市民の強い信頼によって運営されてきたと言っても過言ではありません。震災後は、地域復興を第一に考え、萬画館の再オープンに関しても他人任せではなく、自分達で率先して汗をかいていかないと迅速には進まないと感じています。今回の震災で、良くも悪くも"萬画館"は注目を浴びています。そんな中、萬画館再オープンに際して市民だけではなく、多くのマンガファン、石ノ森ファンが、支え応援して戴いている重さも想像以上に感じていますし、今までとは少し違った使命感をひしひしと肌身に感じています。

《取材を終えて》

『石ノ森萬画館』は2013年2月12日より常設展示室のリニューアル工事に入り再度休館するとの事…再々オープンは、2012年3月23日。また、沢

山の来訪者で"萬画館"をはじめ、石巻全体が賑わう事を期待したいと思います。

お急がしい中、お時間を割いて対応頂きました、木村 仁様。ご協力大変有難うございました。

■宮城県石巻市産業部商工観光課

主幹 高橋章弘氏と主査 熱海照郎氏に伺う

多くの建物が被災している中、萬画館復旧を決断した背景には、市として"何を残して何を取り壊すか"の選択がまず重要でした。萬画館は耐震設計されており、その一階部分は浸水し大きな被害を受けましたが、多くの人命を守った"津波避難ビル"にも成り得ることが証明され、単に萬画館が漫画を展示するスペースでないことも実証された形となりました。

震災後、617日間の休館をへての再オープンを迎える事が出来ましたが、周囲の環境も大きく変わってしまった様です。石巻市は宮城県第二の都市として15万人の人口を有していましたが、今回の震災で11~12万人まで減ってきており、震災後も何とか街を盛り上げて行かなくてはならない…と云う、益々苦しい状況も続いています。

インフラ優先の復興事業では、漁港や沿岸部の地盤沈下が激しく、復旧の障害となり、各所でなかなか効率よく進まない状況があります。石巻市は、水産業と水産加工業で成り立っている街ですが、一番大切な魚の水揚げ市場の復旧も遅れています。そんな中で、巨額の費用がかかる『石ノ森萬画館』再開に対して、「なぜ"萬画館"が先に再開するのだ！…」等のお叱りの声も多々あります。我々としては、批判云々よりも現状で出来るところから、同時並行的に復旧していかなければ少しも前へ進めない…という現実もあり、多くの方々からの再開への期待を頂いている現実もあって、なんとか再オープンを迎える事が出来ました。

震災前は、主にコアなマンガファンや、県内からの観光客と子供たちがこの施設を利用している…と、考えていましたが、震災以降は、石ノ森氏や作品のファンにかぎらず、被災地を訪れたボランティアの人々や、被災地の視察に来た人達などにも訪れて戴き、11月17日~18日の再開オープニング2日間では8000人強の来場者があったそうです。

"地域再生"は今後も続きますが"復興再生"のシンボリック施設として、世間の認知度が上がったのだな…と感じる事となりました。企業、ボランティア、商店街、大学など様々な個人、



高橋章弘 様



熱海照郎 様

団体、等々からも支援を戴いていますが、改めて痛感したのが、石ノ森章太郎先生の知名度とマンガの持つ力。サブカルチャーとしての可能性の高さです。今回も、世界中から熱狂的なマンガファンに応援いただき寄付金の中には、ロシアや海外のファンから寄せられたお金も含まれています。

《取材を終えて》

私たちがニュースなどで触れる情報はあくまでも表面的であり、行政には行政の苦渋があることを知りました。震災以前から、人口流失や過疎化の問

題が石巻市を悩ませていた事実が、東日本大震災をへてフォーカスされ、新たな良い展開、新たな良い後押しになることを期待してやみません。

お急がしい中、お時間を割いて対応頂きました、宮城県石巻市 産業部商工観光課主幹 高橋章弘様・主査 熱海照郎様。ご協力大変有難うございました。

3.東京に戻って

■日本設計・黒木正太郎氏に伺う

最後に、『石ノ森萬画館』の設計者でもある株式会社 日本設計・黒木正太郎様からもお話を伺い、建築の外観に関するエピソードやコンセプトを伺うことになりました。

建築のユニークな外観は、石ノ森章太郎氏"ごのみ"の建築であるのはすぐにも頷けましたが、最初に思いついた着想は"石ノ森"と"石巻"の「石」繋がりでした。若い所員に多摩川へ行って形の良い石ころを拾わせて白く塗り、周辺地図模型に張り付けてみました。初対面の石ノ森先生に対して、少々、ユニークなプレゼンテーション・空想の話を見せて頂きました。それは、かなりファンタジックな話で、「SF映画、とくに洋画では宇宙人は必ずニューヨークのマンハッタン島に攻撃を仕掛けてくるのが一つのセオリーですよね…」「今回の敷地のある中瀬がマンハッタン島に似ていますので、マンガタン島と設計の仲間内では名付ける事としました。」「マンハッタン島と勘違いした宇宙人がマンガタン島に降りた。」「その宇宙人が石巻とそこに住む人達を大いに気に入って住み着いた…それが、石ノ森先生！あなたなのです…ヨ！！」「そして、その宇宙船こそが今回の建物(萬画館)です…。(笑)」

その話が先生の得心を得て、「ベクトルの異なる別々のヒントから構築する、まったく異なった発想方法は、漫画家としての大切な創作方法です。」「建築創作にも似たような発想があるのです

ね…」との共感を頂き、あの宇宙船の様な外観が実現し、巨大な"石"のデザインが具現化する事となりました。

実施設計にあたり最も重要と考えた事は、中州という地形的な事を踏まえて、川の氾濫や増水に関する事でした。1960年、かの地を襲ったチリ沖地震の津波が6mであったことから、展示スペースを河川水面から8mのラインに設定し中瀬の形を考慮しつつ、水の流れを想定してピロティー形式の水を受けない形に組み上げました。

建物を川筋と並んだレイアウトとし、建物の上流側の形状も舟形にして、増水した場合の水の抵抗を左右に逃がし易くしたデザインが、震災時の津波被害を最小限に抑える事ができた要因です。

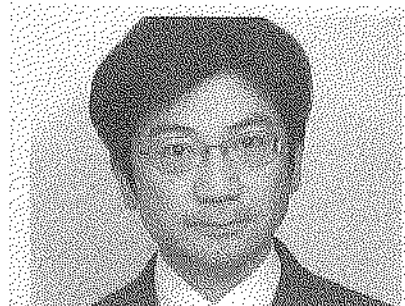
《取材を終えて》

「建築は内に広げるより、外に向かって広げるほうが何倍も楽しいに決まっている。」と言い切られた黒木さん。立地や建物の用途に物語性を結びつける事や、駐車場を市街地に置き、来訪者が市内を散策しながら"萬画館"に訪れる地域効果…等々、嗅覚の鋭さは、設計者としての素晴らしい感性の持ち主だということが感じられました。お急がしい中、お時間を割いて対応頂きました、株式会社 日本設計・黒木正太郎様。ご協力大変有難うございました。

4.最後に思うこと

『石ノ森萬画館』の"萬画"に込められた意味は、石ノ森章太郎氏が半生を掛けて描き続けた"マンガ"への執念のようなものを感じずにはられませんでした。

先に述べた、人類に対しての警鐘や、反戦、様々な伝承や伝説などメッセージ性の高いテーマと共に同氏の作品には、大人も魅了する数々の名作を世に送りだしています。テレビドラマとなった"HOTEL"や"章説・トキワ荘・春"などの作品もあり、もはや子供向け



黒木正太郎 様



青空の下優美なシルエットを見せる萬画館

に限ったマンガではなく、大人にも十分楽しんでもらえる、大衆娯楽的な"絵付き小説"への変貌と挑戦があったと思われる。

江戸時代の瓦版や浮世絵なども、今では美術やアート作品として、世界中の著名美術館に貴重な日本文化として迎えられ、その地位が確立しています。近未来に置き換えれば、漫画や映像…など大衆文化と捉えがちな表現にも、文化的芸術的価値の高い作品が登場し、時代の変遷をへて、その作品の実力如何で現在の時代を象徴する芸術作品としての価値を評する日も近いと思われる。

"萬の画""萬画"に込められた同氏の意気込みが、石巻の人達を感化させたように、日本中、いや世界中の多くの方々がこの稀にみる萬画作家の足跡に触れ、石巻を訪れて頂ける事を願って止みません。

昨秋、情報文化委員会からお誘いを受け、東日本大震災の被災地石巻市への1泊2日の取材旅行に日帰り参加させて頂いた。それは、取材先となった石巻市雄勝への思いがあったからだ。

ことの動機はこうだ。私の住む街は京都。永く住んでみると、観光資源としての神社仏閣や京町家だけに限らず、近代建築のすばらしさに気付かされる。中でも私のお気に入りの一つに、三条通りと高倉通りの交差点角にある旧日本銀行京都支店(1906 竣工)がある。今は京都文化博物館の別館となり、周辺に建ちはじめた高層マンションなどによる街並みへの影響が気になるところではあるが、この地域のランドマークとしての存在は今なお続いている。設計者は、辰野金吾。関西では大阪市中央公会堂や奈良ホテルなどの設計者としても知られているが、代表作は何と言っても首都東京への玄関口である東京駅丸の内駅舎である。日銀京都支店から遅れること8年後の1914年にその駅舎は創建され、M7.9の関東大震災での被災は免れたものの、太平洋戦争末期の空襲で屋根などを焼失した。戦後の改修で3階から2階建てに姿を変えていたが、昨年の10月1日、約5年の工期を経て創建当初の姿を再び蘇らせ再開業した。

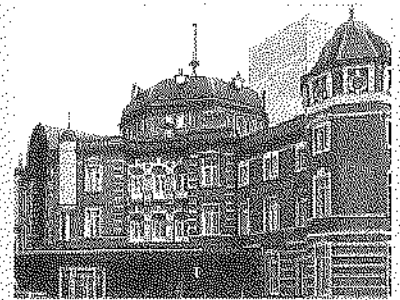
私は、この駅舎内にあつて再オープンした東京ステーションホテルに興味をそそられ、その5日後の6日に宿泊した。そして、あらためて新装なった外観を間近に見た。それはパーントシェナーの煉瓦に白の御影石のラインが配され、チャコールグレーの屋根が建物全体を引き締めていた。外壁が辰野式と呼ばれる同じ仕様ながら、屋根は見慣れた地元旧日銀京都支店の緑青色の銅葺きに対し、丸の内駅舎のチャコ

ールグレーは、私に違った趣を感じさせた。帰宅後、この屋根材は東日本大震災で罹災した雄勝の天然スレートであることを知る。そこにタイミングのよい石巻市雄勝への取材のお誘いがあったのだ。

さて取材当日を迎える。東京駅から新幹線で2時間足らず。降り立った仙台駅で取材メンバー全員が顔を揃え、レンタカーで一路、目的地の石巻へ向かったのだが、その道中は、未だ復興の途上にあることをそこかしこに思い知らされることとなる。経つこと約2時間。私達は旧北上川の中瀬の先端に立っていた。まずは復興のシンボルとして他の公共施設に先んじて再オープンした石ノ森萬画館を訪ねる。津波によって瓦礫に埋もれ甚大な被害を受けた当館が、多くの人々のサポートで見事オープンへと至った足取りが展示から読みとれ、胸を締めつけられる思いを抱きながらの館内見学となった。

この萬画館と川を挟んで向き合う復興マルシェで昼食をとった後、いよいよ私の関心事、雄勝天然スレートを取り扱っておられる四倉製瓦工業所へ向かった。そこはJR石巻駅にほど近く、門を入るとまずは積み上げられた天然スレートが迎えてくれた。奥にすすみ、お住まいの一室で四倉年思也社長にお話を伺うこととなった。

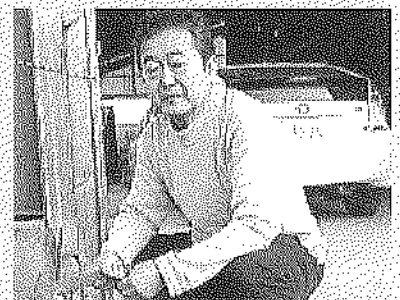
四倉製瓦工業所から東北方向に車で1時間程の雄勝には2億5千年前の地層が地表に隆起した地域があり、雄勝石と呼ばれる玄岩石(粘板岩)が産出する。これが高品質の雄勝天然スレートや全国の硯の90%という圧倒的なシェアを誇る雄勝硯の原料となる。震災によって、採石場への道路が崩れたままとなっていることや、加工設備を備えた工場が、跡形もなく損壊してしま



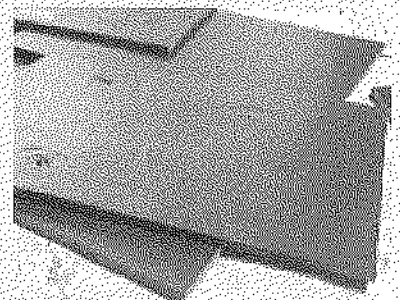
東京駅丸の内駅舎



天然スレート



四倉製瓦工業所の四倉社長



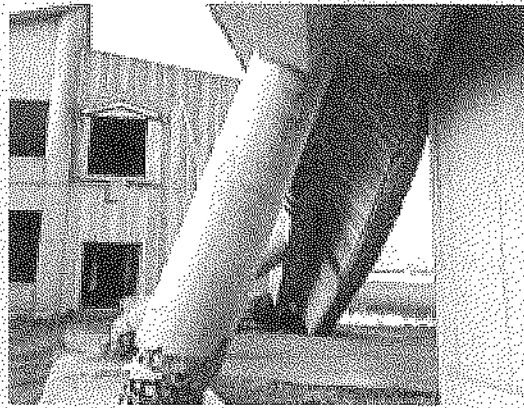
東京駅に使用された雄勝天然スレート

い、未だ再開のめどが立っていない厳しい状況にある。いずれも在庫の販売のみとなり、生産には至っていないのが現状である。そんな中、工事が進む

東京駅丸の内駅舎の屋根材に在庫の天然スレートが使用された。津波に打ち勝った復興のシンボルという思いをのせて。1枚のサイズは長さ1尺(304mm)、幅が6寸(182mm)で、厚みが6mmと四倉社長。在庫が限られ、屋根すべてを覆うだけの数量はそろえられず、多くはスペイン産の天然スレートが使用されたものの、正面玄関や南北のドーム屋根などの主要部分に雄勝の天然スレートが使用された。

さらに興味深いお話としては、昭和50年代に駅舎の屋根のホーム側7割ほどが登米と雄勝の天然スレートでふき替えられたことがあったそうで、当時のものは矩形の4辺の内、2つの角を丸く落として鱗形にしたものだった。今回の復原に際し、創建時は四角であったことから、洗えば再利用できるそれらスレートを選り抜き、丸い方を逆さまにし、重ね部分に組み込むことで有効活用できたとのエピソードもご披露いただいた。雄勝石には、粘板岩特有のある特定の平面に平行に割れやすい劈開と呼ぶ性質があり、これを利用して厚み4~9mmの矩形の薄板に仕上げることで天然スレートへと生まれ変わる。表に出て、四倉社長自ら雄勝石を薄く割いたり、角を丸く落としたりする作業を見せていただけることになった。先の尖った握りもついていない素朴な金づち様の工具で、私たち素人にはわからない石の断面にある劈開の戸を優しく数回叩くと、あっさりと平板面を持った薄板が割け分かれた。まさに2億5千年の眠りからそっと目を覚まさせる石への思いやりの術であった。次に角を落としてアール状に表情をつける手技も。藁束を切りそろえる「押し切り」と呼ぶ農具があるが、それに似た専用の器具を使って手際よく切って見せていただけた。

~~~~~  
 尽きることのない四倉社長との話に未練を残しつつも、秋の日のつるべ落としとなってしまう明るいうちに



市立大川小学校の破壊された校舎



雄勝湾を望み雄勝石が露出した崖

と雄勝石の採石場へ向けて車を走らせた。途中、北上川下流域にあって、あの74名もの生徒と教職員員の尊い命が失われた石巻市立大川小学校に立ち寄り、手を合わせる。破壊された校舎に残る津波の猛威をまざまざと見せつけられ、言葉に出ない悲しみと鎮魂のひと時をすです。そして再出発。

まもなく地層が、ほぼ垂直に立ち上がった岩肌が左前方に見えた。本来の採石場ではないが、かつての採石跡を偲ばせるかのような山裾にできた崖であった。周辺に散乱していた小石を手にとって石同士を叩いてみると、それは四倉製瓦工業所で見せていただいたあの劈開する雄勝石であった。振り返ると大津波がすべてを呑み込んだとは想像もつかない、極めて波穏やかな美しい入り江に面していた。

#### <雄勝での取材を振り返って>

雄勝天然スレートは屋根材を主に外壁材や床材などに使用されているが、

取付が簡易で、軽量、かつ廉価な材料にその市場を奪われ苦戦を強いられている。現在、雄勝石を割って畳ける石の性格がわかっている職人さんはわずかに5人であり、会社としては四倉製瓦工業所がオンリーワン。今こそ技術の伝承を真剣に考えないといけない時期になっている。まさにわが国の多くの伝統工芸が直面している市場の縮小、いかに次代への技の継承をするかという共通の問題に通じている。伝統工芸が“守り”だけでなく“創造”も併せて行うことが大切とされているように、雄勝天然スレートも未来を見すえ、新たな“創造”による市場開拓を図ること、そのための様々なジャンルとの交流を通じて、異なる分野への応用や新たな発想からの需要創出を図ることが、喫緊の課題と感じた。そして、まずは早期の採石と加工工場の再開を切に願う次第である。

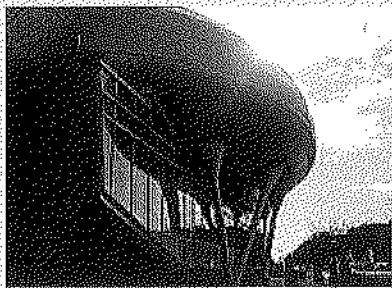
■はじめに

2012年11月25日(日)aaca 情報文化委員の石巻取材旅行に調査委員会として参加させていただいた。日帰り取材だったが非常に充実した内容の濃い1日だった。

上野8時発のやまびこに乗り、10時に仙台着。仙台駅でレンタカーを借り、11時前に石巻に到着した。本日のメインであった四倉製瓦工業所の四倉社長を訪ねるまで時間があつたので、午前中は石ノ森萬画館を見学した。

快晴の日曜日に訪れた石ノ森萬画館は家族、カップルなど、老若男女問わず賑わっており、笑顔に溢れていた。

単なる娯楽と思われがちな漫画やアートといった抽象的な存在が、震災から2年が経った今、震災や津波といった悲惨な現実や、今後の復興に貢献できる具体的な可能性を見つけた気がしたが、次の日に企画されていた館長の話を自分は残念ながら聞く事が出来なかった。今回はスレートに絞り、



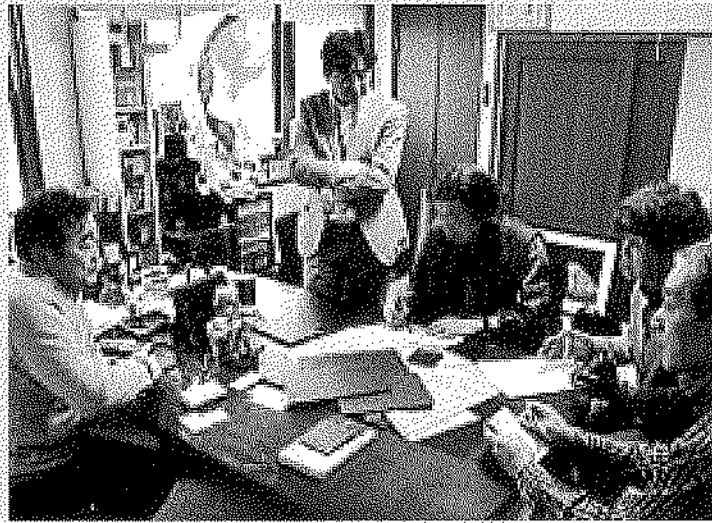
快晴の石ノ森漫画館

報告させてもらう。

.....  
■雄勝スレートの現状

まずは宮城県石巻市雄勝地スレートの現状を四倉社長のインタビューから抜粋し、報告したい。

雄勝の歴史は約600年前の室町時代の頃といわれている。硯師が見事な技を持っていた為に、伊達藩お抱えとさ



aacaのメンバーによるインタビュー



雄勝石を縦に裂く四倉社長



職人の手で美しく三枚重ねで貼られた

れた。又、その硯材を産する山を「お留山(おとめやま)」と称し、一般の採石を許さなかった程、大切にされた存在であった。

現在スレートの会社は日本で四倉さんの1社のみ。職人は現在5人しかいない。若い職人さんで47、48歳。残りの4人は60代である。山の割り方(雄勝石を採掘の現場で掘っている石の切り出し職人)の方が高齢化しており、平均年齢70代である。現在は震災で現場までの道が塞がれており、電気も動力(200V)が現場まで来ておらず、大きな採掘は不可能な状態が続いている。震災前も後継者不足であったが、震災が追い討ちをかけたのである。若者の技術者育成を文科省からも打診されるらしいが、元来需要が少ない上に復興の遅れ、現在は肝心の石も採れず、若い技術者を育てる環境を整える事は不可能である。

#### ■雄勝スレートの可能性

スレートは屋根の材として非常に優秀な素材である。耐久年数は5~60年あると言われている。しかし現状はもっと長いと思われる。なぜなら昔は銅釘だったので杉しか打てなかったが、ステンレス釘に変更等、改善点が多々あるからだ。職人の工夫と技術の進歩により、耐久年数が格段に伸びているのではないかと推測される。

その一例に震災時の仕事である、東京駅の復元がある。東京駅には昭和50年代に葺き替えたスレート(国産)が一部で使われていた。十分使用可能な状態であった為、そのスレートを活用し、復元する計画をたてたのである。その貴重なスレートを左右のドーム屋根に使用した。このようにスレートは見た目が美しいだけでなく、使用年数も長く、環境にも優しい素材であるといえる。

因みに東京駅復元の為に使用しようとしていた国産スレートは製造も終え、

検査も終了していた出荷直前に震災で、その殆どが流された。奇跡的に残った国産スレートで正面玄関を復元した。(足りない部分は物が良い6mm厚のスペイン産スレートを選別し使用した)東京駅復元は国産スレートの最後の大きな仕事になってしまうかもしれない。

インタビュー中に一番驚いたのはスレートを薄い板に加工する方法である。薄い板を生み出すのに、機械でスライスするのではない。手仕事で割くのだ。職人が刃物を入れ、薄く縦に割く。だが、新鮮な雄勝石にかぎる。3日も経つと安定してしまい、鮮度を失った雄勝石は強度と引き換えに、美しく縦にスライスすることを拒む。熟練した職人でも縦に割く加工は不可能になるのだ。

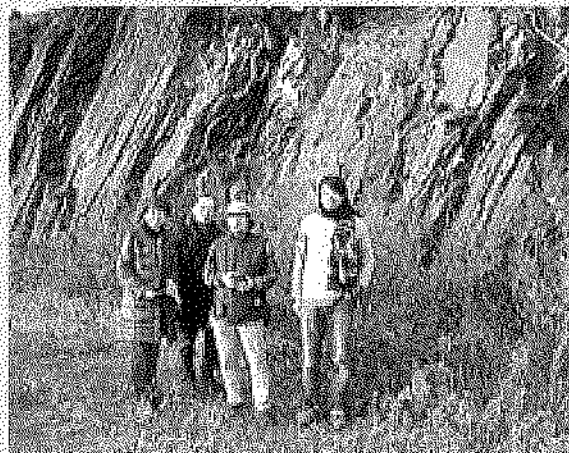
天然スレートと屋根瓦の違いを訪ねた我々に、四倉社長は簡潔に熱く答えた。大きな違いは職人の施工技術であると。そもそも屋根の素材として形つくられた瓦と天然素材をそのまま使用するスレートを同じ屋根材として比較する事はナンセンスである。職人の圧倒的な技術と工夫でカバーし、600年に渡って技術を伝承してきた。又、技術だけではなく、石を見極める目を養う事も大切である。それを知らない業者が施工し、ポロポロになったスレート屋根を四倉社長は数多くみてきた。

#### ■雄勝スレートの現状

現在、四倉製瓦工業所はスレートが採掘出来ない為、それ以外の仕事で生計を立てている。

一時的な活用方法かもしれないが、著名なコピーライターが気仙沼に間伐杉とスレートをを使用し、事務所を設立したそうだ。写真をみせていただいたが、デザインされたアトリエで、スレートは優れた床暖房として活躍しているそうだ。

長く伝承され、研ぎ澄まされた日本の技術でさえ、稼げない産業は後継者も育たないし、廃れる。しかし雄勝石はまだ地中に多く存在し、エコリサイクルが見直されている現在において、失うにはあまりに惜しい技術である。全国に存在するであろう、優れた日本の伝統技術の後継者不足が震災被害により、輪をかけて深刻になっているのである。今回の地震、津波は沢山の大切なものを東北地方から奪っていった。600年伝承されてきたスレート加工の優れた技術さえも今現在、ゆっくりと確実に奪おうとしている。



雄勝にて

情報文化委員会で石ノ森萬画館を取材することになった。萬画館は地域を元気にするために 2001 年につくられたと聞いている。被災後いち早く予算がついて再開した萬画館、地元ではどのように見られているのだろう。萬画館を知る上で、関係者とは別の角度からも石巻を取材できたらと、思ったものの、現地に滞在できる時間は限られている。はてさて、誰を訪ねたものか…途方に暮れていた私に、友人の亀倉加久子さん(『祈りのかたち一宮城の正月飾り』2003 年宮城県神社庁刊行の編集者)が、伊去波夜和氣命神社(いこはやわきみことじんじゃ)(通称:明神社)の大國龍笙(おおくにりゅうしょう)宮司を紹介してくれた。昔から地域の核となってきた神社と、新しい街の核としてつくられた萬画館。どのような接点があるのかもわからないまま取材を申し込んだのに、「どうぞ」とひと言、温かい声が応えてくれた。

東北の夜は早い。市街地、萬画館、雄勝と取材し、明神社に着いた頃にはとっぷり日が暮れていた。神社は小高い丘の上か、山を背にしているものと思込んでいたのに、ナビが告げた場所は平地。通常、神さまをお祀りするのは、失礼にあたらないように、人が住んでいるところより高い場所が選ばれるとのこと。海の近くの明神社がある所は砂丘だったそうだ。

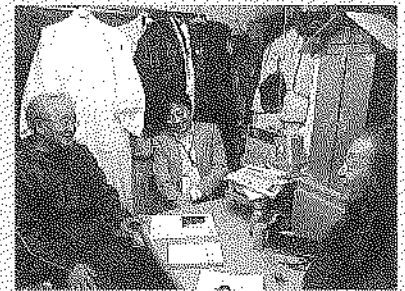
「地震になったらおみよんつあん(お宮さん)にあがれ」昔から氏子の間で言い伝えられてきた。津波は石巻湾(南)、万石浦(東)、そして西側の3方向から押し寄せてきて神社の境内で渦を巻いたが、教えの通り神社に逃げ込んだ人は全員助かったそうだ。その数約 250 人。「神社の足を(波が)洗うと渡波(ワタノハ)地区は全滅」とも言われてきた。引き波が起こらなかったのと、境内の松の

木がガレキから神社を守った。何よりも「250 人の重さで、拝殿が浮き上がらなかった」と愉快そうに話される宮司。

渡波地区は、漁業、水産加工、養殖、海産物の採取など、海に携わる仕事をしている人たちが住んでいた。ワカメ 1 本、カニ 2 匹が浜人の生活。農業に比べて、漁は一人ではできないが、飢饉で人が死ぬということはない。常に海から恵みをいただいている。自然(神さま)の流れの中で生きている。「だから、津波も仕方ないかなと、この辺の人たちは思う。誰の責任でもない。当たり前。あっさりしているの。立ち上がりも早いかもしれない。」

「震災でいい経験をしたのかもしれない。」思いがけない言葉に驚いた。皆が忘れていた「不自由さを思い出すことになった」と。漁港がなくても魚は獲れる。魚市場がなくても魚は売れる。震災後 1 年目は、自分たちのことで精一杯だったが、落ち着いてくると「ありがとう」を言う場所がないことに気がつく。2 年目には大國宮司が守っておられる 14 社すべてで祭りが行われたそうだ。

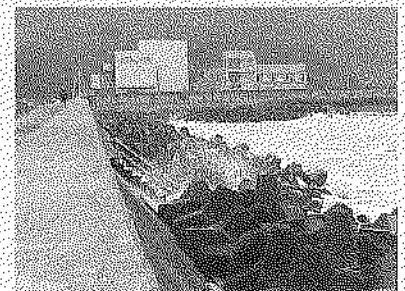
神社は氏子たちが神さまに感謝を捧げるところ。他の場所に移ったら成り立たない。どんな時にでも「おみよんつあんだけは変わらない」と、社務所も自宅も被災したのに、宮司は戻ってくる人のために、震災後もガレキの中で神社を守り続けたそうだ。神社は 24 時間体制。地域の人たちのつながりの中心に神社がある。それ故に、宮司は神社を修復するにも他所からの寄付に頼らないと言われる。地域の人たちに大事にしてもらうには、自分たちでやらないと。自立の心が必要。「もらい癖はよくない。」ときっぱり言われた。



プレハブの社務所で大國宮司(向かって左)のお話しを伺う



スーパー堤防から見た渡波長浜地区



スーパー堤防



250 人の人たちを守った拝殿

次の日の朝、私たちは神社にもう一度車を走らせた。昨夜は真っ暗で見えなかったが、海はすぐ近く。神社は少しだけ盛り上がった場所にあった。地元の人たちが「スーパー堤防」と呼んでいる防波堤の下では、波が激しくテトラポットにぶつかっていた。砂浜だったところに魚市場ができ、海流が変わったそうだ。小さな土塁の堤防が、いつか無骨なコンクリートの塊になり、波がきつくなると、昨夜話してくれたのを思い出した。

神社の境内をゆっくり歩いてみる。250人もの人が助かった拜殿は意外に小さい。境内のあちこちには恵比寿さまや大黒さま、布袋さま、お稲荷さん、招き猫、獅子頭など、所狭しと並べてあった。中でも多いのが恵比寿像と大黒像。海岸沿いの地域は恵比寿信仰かと思っていたが、この辺りは、恵比寿・大黒を一对として信仰すること。これらの像は、津波で流れてきたそうで、ひとつひとつ丁寧に祀られていた。すべてを受け入れ包み込む温かな心を感じながら、明神社を後にした。

<取材を振返って>

南方熊楠が『神社合祀に関する意見』の中で述べている「(神社は)地震、火難等の折に望んで避難の地」ということが実証されていた。

神社が地域の人たちの心の拠り所だけではなく、文字通り生命の拠り所としての役割も担っていることを、宮司は身を以て教えてくださったように思う。震災の時には、きっと東北の随所で同じような光景が見られたのではないだろうか。

また、私たち日本人の心の底には、自然を敬う気持ちが流れていることに、改めて気づかせていただいた。それが、震災で世界が驚いた、日本人のやさしさや芯の強さを支えているのではないだろうか。萬画館の設計をされた黒木氏(日本設計)は、世界の人から日本のマンガが評価されるのは「やさしさ」があるからと話された。師である建築の横文彦先生が「やさしさを失ったら日本



流れ着いた恵比寿様と大黒様

文化はおしまい」と言われたとか。

神社と萬画館。この度の震災では、どちらの建物も津波から人々を守った。そう言えば、萬画館の建物は高床式の神社様式のようにも素人目には見えるような…。一見かけ離れているかのように思うこの2つが、実は日本文化という根底で繋がっているのは確からしい。

取材当日は夜遅くまで、そして、翌朝は朝早くからお邪魔したのに、いつも快く、笑顔で受入れてくださった大園宮司に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。



翌朝に参道で宮司のお話を伺う(向かって左)

## 2. 田村市～いわき市訪問

訪問日:2013年4月27日(土)28日(日)

訪問先:

### 1)田村市

田村市役所、船引公民館、船引総合福祉センター  
堀越のお人形様、屋形のお人形様、朴橋のお人形様  
小沢の桜、あぶくま洞、阿武隈高原仙台平  
阿部文殊菩薩堂、田村市アンテナショップ船引公民館

### 2)田村市～いわき市

### 3)いわき市久之浜大久地区

お世話になった方々:

|            |                    |
|------------|--------------------|
| 田村市役所      | 富塚宥暲様(市長)          |
| 田村市役所商工観光課 | 吉田典良様(課長) 吉田元香(主事) |
| 堀越お人形様保存会  | 桑原喜美喜様(会長)         |
| 屋形お人形様保存会  | 吉田渉様(顧問)           |
| あぶくま洞管理事務所 | 吉田雅弘(所長)           |
| 農家民宿みちくさ   | 渡辺様ご夫妻             |
| 助川様ご兄弟     |                    |

参加者:

坂上直哉、七字祐介、高橋圭太郎、露口典子、日高單也  
南三一郎、吉野ヨシ子  
政田俊夫、南万喜子、栗田祥弘(特別参加)



田村市 富塚市長



お人形様と一緒に



各所に設置されている放射能測定器

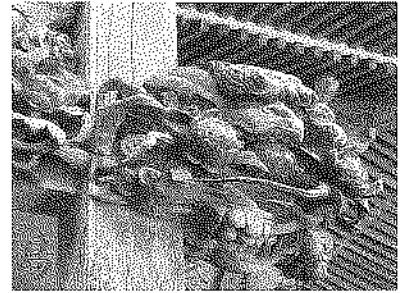




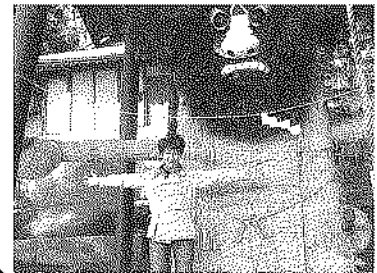
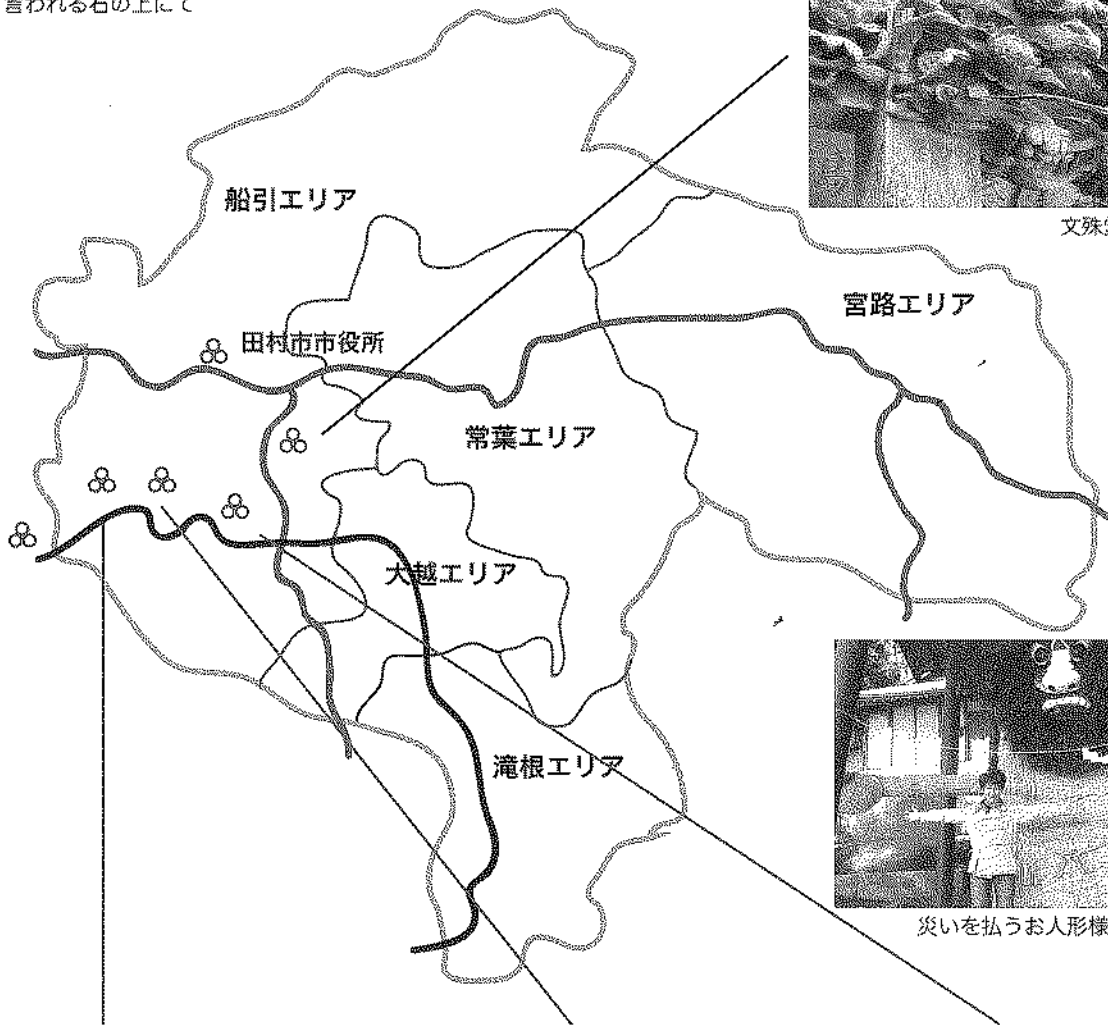
坂之上田村麻呂之が座ったと言われる石の上にて



田村市の木造仮設住宅



文殊堂 彫刻



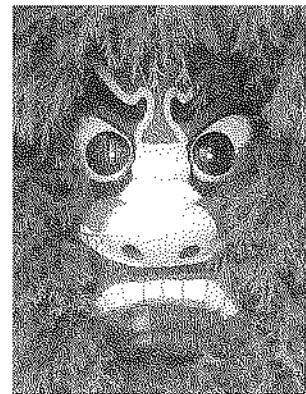
災いを払うお人形様（堀越）



屋形のお人形様



朴橋のお人形様



堀越のお人形様

## ■27日(土)

東京を8:00頃出発し郡山に9:30着。レンタカーにて11:00すぎ田村市内に入り吉野の身内の運転で、いわき市へと車を走らせることになる。天候は、私達の考えていたよりずっと寒く、特に風が東京から数時間前に移動してきた者にはとてもきついものであった。

小野インターに入る前に、「初恋」の映画で一躍有名になった「小沢の桜」に立ち寄る。タバコ畑の真ん中にポツンとたたずむ桜、例年ならこの時期は葉桜であるのに今回は私達を待っていたかの様にひっそりと、又リンとした姿を見せていてくれた。

撮影ポイントによっては、半鐘と山とお堂と原風景がそのまま、心を昔にタイムスリップしてくれる。地域の人々は、「何もない。」と言うが、「すばらしい。」と心に強く、映像として残るものであった。

先週は雪の中に桜の満開が見られたと言う。そんな、場面を想像しながらその場所を後にした。

いよいよ、田村市を離れ、小野インターから磐越自動車道に入ると、まもなく夏井川沿いに千本桜が時折目に入る。桜は名のごとく千本続いていて、これも圧巻である。時折町民が楽しんでいる様子が伺える。しばらくして、ICから常磐道に入る。ここを、北に北上すると、福島原発に行く道である。私たちは、広野ICまで向かうが、それ以上は、通行止めになっているからである。

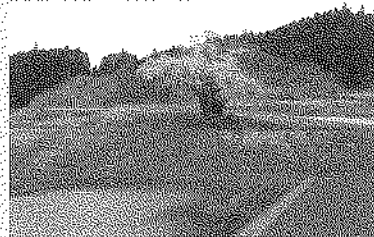
広野で降りると右には、広野火力発電所が見える。広野から楡葉町の途中まで車を走らせて、行くが結構車も多く走っている。周りの家々は住んでいる様子は見られないがコンクリート工場などは、忙しそうに動いている人々

が見受けられる。

ガソリンスタンドやお店は多少開いているようである。警察のマイクロバスのいる所で停車して一息する。バスが何台も見かける。防護服を着た人々のバスのほか空車もありピストン輸送なのであろうか。やはり緊張感が漂う一瞬である。トラックも頻りに私達の前を通り原子力発電所に向かっているのは、確かである。

ここで、リターンして南へ海沿いを走ることにした。海沿いは、そのままになっているところも多く、流されて田んぼの真ん中にポンプ車や乗用車が放置されている。家も、くずれかけたままのところも多い。見回りをしているのだろうかバトカーにも数台会う。

再び南下し久之浜を目指す。周りは、



秋葉神社



この先通行止め



久之浜に残る神社

土台だけ残されて、すでに材木などは取り除かれている。2メートルぐらい

盛り上がった場所に神社が建っている。昔から神社など高台が多いといわれているが、まさにそんな実感をした。海に向かって祈り続けている様でもある。これからの復興に向けて土盛の調査をしていた。

いわき地区では特に被害が多かったということで小学校の校庭に仮設の商店街が設けられていた。観光課の中には当時の被害の様子が沢山写真に取られて掲示されてあった。遅い昼食は味噌おでん。しかもご馳走になった。その後、いわき市を後にした。

次は田村市を目指すこととなった。種類と数の多さでは東洋一とも言われるあぶくま洞に入洞する。色々な形の鍾乳石に圧倒される。滝根御殿と言われる広い場所ではコンサートも行われるということである。是非聴きたいと思った。3.11では鍾乳洞の損傷はなかったとのことである。鍾乳洞から仙台平へ行くと、阿武隈山系が360度見えるすばらしい眺めであった。

近くには坂上田村麻呂の記念碑が建てられていた。

## ■28日(日)

いよいよお人形様の衣替えの見学である。商工観光課の吉田課長と吉田課員の案内にて堀越のお人形様に到着すると組代表の方々が顔のひげや髪の毛に使うための杉の枝運び、頭の竹かごを修理していた。もともとは畑にあったそうであるがこの神社に移したようである。この堀越のお人形様は明治38年に衣替えや祭礼が大飢饉で一度断絶したといわれている。現存する面は三体の中では一番古く江戸時代のものと言われる。ここ明石神社は坂上田村麻呂が腰を下ろしたといわれる石が祀られてある。この神社の一角にて小学生が巫女踊りを練習していた。早速見学させていただいた。地域の方々が小

学生の指導にあたっていた。厳かに舞う姿と鈴の音は又格別であり、地域の伝統が脈々と受け継がれているお人形様の衣替えと重なって、より深く感動させられた。寒風の中の衣替えであったが、心はあたたかさでいっぱいであった。

昼食は、船引総合福祉センターでいただいた。その一角に主に市街方の仮設住宅が設けられている。昼食時において下さった富塚市長が田村市の現状と文化についての思いを語ってくださった。田村市は原発から、20キロ、30キロ、40キロの地点に位置している。それぞれの地域があるだけに、除染についての地域的格差があること。報道に振り回されるなど、苦労が絶えないことを、私達聞き入る者にとって真に感じさせる話であった。そんな中でも、文化継承を黙々と伝えている土地の人々が、方々にいることも伝えられました。これは、人々にとっては心の拠り所であり、地域の人々の結びつける大切な場であり、行事を行うことによりコミュニケーションをより深めること。などなど。私達 AACA と市長はじめ地域の人々の考えは、ここで一致したと思われる。

以前、3.11の年に、文化、芸能、行事は計画通り行い前年より参加に積極的であったと、いう。まさに、こんなときこそ、求めて入る、触れ合いの活動だと感じた。

次に平安時代からの安倍の文殊堂に見学に行く。小高い山の上にある。29日は300年たっている杉並木で稚児行列があり、沢山の見物者で賑わうそうである。

次に向かったのはすでに衣替えを終わった朴橋のお人形様を見学、階段を上った所に両手を広げて私たちを迎えてくれたように感じた。昔なら「通せんぼ。」だろうが、今は「いらっしゃい。」だろうか。

最後は、屋形のお人形様を見学に行く。地域の人々が広場に集合し、女性は藁で衣を作っている。男性は、頭の

籠を直したりおひげの杉を運んだり、お顔の化粧直しをしていた。この地域全員での作業は一年の一大イベントだそうである。昔は一家総出のイベントだったとのことである。

とにかくすばらしい、お人形様である。これからもこの文化は続くだろうと、私たちは思った。なかなか田村市に足を運ばない方は千葉県佐倉市にあ

る国立歴史民俗博物館に展示されている、お人形様に逢ってください。

きっと田村市に足を運びたくなりませよ♪



都路地区の仮設住宅



お人形様の衣替え



### 3.11 被災地への訪問

政田俊夫(建築家)・まちづくりフォーラム・ひの代表

今年4月27日、連休の初日に原発被災地の福島をおとづれた。中通りの田村市と浜通りのいわき市久ノ浜地区だ。訪問団は、「日本建築美術工芸協会」という団体で、その一員としての参加だった。

訪問した時期は、あいにくまだ寒く東京ではとっくに散ってしまった桜がまだ咲いていた。21日には仙台市で66年ぶりの積雪を記録し、満開の三春町の滝桜に雪が積もり、多くの見物客が銀世界を楽しんだ。

現在は、「八重の桜」が放映されているため、多くの観光客が会津地方を訪問する。さいわい原発の被害もあまり影響を受けることもなく、観光客がもどっているのである。

#### ■田村市について

田村市は、船引町・常葉町・都路町・大越町・滝根町と合併して平成17年3月に新しい市としてスタートした。それぞれの町が主体となって行政局が置かれ、それぞれ行政局長さんが配置されている。

訪問団が表敬訪問し、富塚市長自らご挨拶に見え丁寧なお迎えの言葉をかけてくださいました。お忙しい中、約1時間にわたって被災の現状報告を熱心にされました。そして、いまだに2000人の都路地区からの被災者を預かっていることや風評被害に苦しめられ、産業・農業・観光などが再建途上にあることを熱心に訴えられ、全国の人々にぜひ真実の姿を伝えてくれるようにとの要請がありました。

田村市には、全国でも有名な「あぶくま洞」という素晴らしい鍾乳洞があります。そして桜が美しいのどかな高原都市だ。また、都路(みやこじ)ハムという、有名なハムを生産する。

都路ハムは DLG「ドイツ農業協会」という120年以上の歴史を持つ、世界最古にして世界最大の加工食品コンクールで連続金賞を受賞してきた実績を持つ。このコンクールには世界各国から約3,500品目、我が国からは250品目が出品されている。1997年(平成9年)の第三セクター方式で設立された株式会社ハム工房都路が生産し、代表取締役を冨塚有暲 現田村市長が務めている。

田村市の市域面積は、458.3 km<sup>2</sup>で山林が64%、田畑が19%を占め、人口41,297人。(2010年田村市勢要覧)

ちなみに日野市は、市域面積27.53 km<sup>2</sup>、人口178,673人である。(2013.1日野市暮らしの便利帳)これを比べても、田村市がいかにゆとりのある市であるかが想像つくと思う。実際案内していただくと、阿武隈山地には大小いくつもの山々が連なり山間には谷合地が連続と続いている。

丘の見晴地には一本桜が美しい景観を見せている。船引町内にある「小沢の一本桜」は、2000年に映画「はつ恋」の舞台になった桜で、田中麗奈さんが主演・真田広之・原田三枝子さんらが出演している。訪問した時はまだ桜が残っていて、菜の花の黄色と背景の山々が見事な風景を見せてくれた。根元にある地蔵の祠も愛らしい。隣町「三春の滝桜」のようなにぎやかさはないが、この桜はいかにものどかだ。

行政の中心は船引(ふねひき)町にあり、磐越東線「船引駅」が最寄の駅だ。都路地区は、市の東にあり、大熊町・浪江町・葛尾村・川内村と隣接しており、福島原発から半径20キロ圏内に一部が入り、警戒区域と緊急時避難準備区域にかかっていたため、この町の住民873所帯2,618人が避難し、2年以上たった現在でも2,000人近い人たちが今も同じ田村市内に仮設生活をされている。平成23年9月末に緊急時



小沢の桜



あぶくま洞



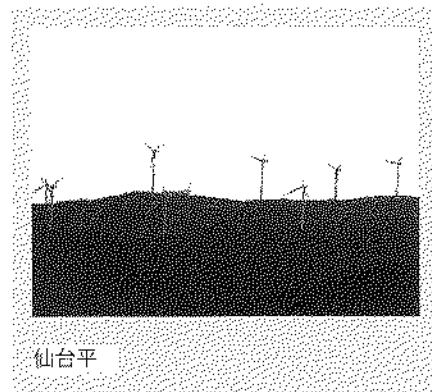
避難準備区域の指定は解除されたものの、いまだに帰還できない多くの住民がいることに心を致さなければならないだろう。

田村市の他の地域は幸い原発被害が軽度であったため、双葉地域からの避難者の受け入れをいち早く決定し、「結の文化」の残る市の地域コミュニティを発揮された。震災の翌日3月12日には7,257人の避難者を受け入れている。最大受け入れ人数は3月13日で8,359人となっている。

地震や放射線の影響が長期期間にわたるため、市民のストレスは高まっており、地震直後から専門家による心のケアや健康調査・健康相談を定期的に実施されていると聞く。

仙台平から郡山方面への眺望も素晴らしく、折しも夕日が会津方面の山並みに入るところだった。眼下に街並みと山々の駈の影が霧の中に美しい光景を見せてくれた。

あぶくま洞の空間放射線量は、0.1マイクロシーベルト/時間でしたから、日野市内での最高線量0.08と比べても大差はありませんでした。



仙台平

#### ■田村のお人形様

田村市にはまた、面白い伝統行事があります。「お人形様」として親しまれていて、船引町の芦沢、堀越地区に背丈が四メートルもある魔除けの神様・地域の守り神として村々に祭られているのです。毎年4月の第二日曜日に実施されるのですが、三春町からいわき市に通じる道路を「磐城街道」と呼び、

かつてはこの街道に五体のお人形様が祀られ、「五人形様」と呼ばれていました。現在では、船引町の屋形、朴木、堀越地区の三体のみが習俗として残っています。主催者の一人、アーティストの坂上直哉さんの話によると、こうしたお人形様は東北地方の各地に残る「道の神」の伝統で、集落の入り口などに多く祀られることが多いそうです。

この画像は、朴橋のお人形で両手を大きく広げて「とうせんぼう」をしているような仕草がよく表現されています。頭は杉の枝・体は藁でできています。顔は朴の木製で、タテ103cm・ヨコ60cm・厚さ13cm、地上寸法は3.5mもあります。毎年解体して新たに作られ顔も新しく塗り直されていました。どのお人形様も一段高い場所に置かれているため、なかなか迫力があり、あたりに睨みを利かせている臨場感にあふれていました。

#### ■風評被害などについて

田村市長さんが力説されていた事柄に、風評被害があります。観光地の放射線量はもう下がっているのにいまだに観光客が戻らないということです。テレビの取材は、現実のあることの真実を報道しないこと、除染途中の事柄をいかにも行政の失敗などと興味本位で報道されることに対して、おおいに迷惑であると強調されていました。畑地の除染は進み、ようやく葉タバコ

の苗の植え付けが始まっていました。田にも水が引かれて田植えの準備が始まっています。

名産「都路ハム」の生産もちょうど訪問した日に再開されたばかりでした。

「田村市災害復興ビジョン」(平成24年3月)の報告によると、被災総額は51億円超となっており、農産物の作付制限・畜産物・水産業(イワナ)被害が27億6千万円、構造物被害が23億5千万円、中でも学校教育施設(幼少中)被害が最も多く11億3千万円となっています。

私たち訪問団は、農家民宿に泊まりましたので、市が全面的に協力して私たちを受け入れていただいたのでした。

農業被害は放射能汚染を懸念して、自主的に作付を断念する農家があり、水稲の566ヘクタール、葉タバコの364ヘクタールを筆頭に、多くの不作付け農地が発生しました。

#### ■教育環境の原状回復

田村市では緊急時避難準備区域にあった2小学校・1幼稚園・1中学校と震災により校舎が大きな損壊に見舞われた菅谷小学校は、それぞれ市の廃校施設などを利用して学校を再開した。市内すべての小中学校は4月6日に入学式・始業式を行い平成23年度の教育活動をスタートさせている。

以下に具体的な教育環境整備の方策を



朴橋のお人形さま

まとめてみると、

- ①菅谷小学校を含めた滝根地区3小学校は統合校舎の建設を進めている。
- ②避難先での教育条件を整備して児童生徒の学習機会を確保する試みもある。
- ③長期にわたる避難生活による不安解消のため、スクールカウンセラーや心の教室相談員、スクールソーシャルワーカー、特別支援教育支援員などによる活動を充実させてこどもたちの心のケアに努めている。
- ④学校・通学路の放射線モニタリング調査を続け、放射線低減化を早急に進めている。
- ⑤保健課と連携し、ガラスバッチ着用や甲状腺検査などきめ細かな健康診断を推進する。

以上のような対策が取られている。

次代をつなぐ子供たちに対し、万全の対策が講じられることを期待したい。

一般住民に対しては、放射線被ばく検査や県民健康管理調査、健診データの管理、健康相談や心のケア、講習会や講演会の開催などの施策がとられている。

### ■すべては津波から始まった

福島第一原発に2011年3月11日、津波が押し寄せた。

この津波によって、原発のすべての電源が遮断された。非常電源が高台に設置されていれば、あるいは爆発は回避されたかもしれない。

想定外を想定しなかった東電には、最も重い責任があるにせよ、国の責任も決して免れることはできない。

我が国の原発立地のほとんどが、海岸に存在している。大津波の災害は過去に幾度もあったのだ。この経験が生かされなかった。

第二原発が少しの標高差で爆発を免れたように、地震による施設の破壊はあったにせよ、電源が遮断されたのは明らかに津波による電源喪失であろう。

そして、未曾有の放射能汚染の長い苦難が始まったのである。

これで今回の3.11被災地の報告を終える。被災地への一日でも早い住民の帰還と復興を願わずにはられない。  
(合掌)

江戸後期から明治初期にかけて、変革期を生きた俳僧で、すぐれた書家・歌人であった大田垣蓮月の歌を紹介して結びとする。

『夫みまかりし時よめる』として、

ともに見し さくらは跡も なつやま  
の なげきのもとに 立つぞかなしき  
蓮月



被災した久之浜・大久地区

平成 25 年 4 月 27、28 日の 2 日間、3.11 の被災地で福島原発事故による警戒区域となっていた地域と被災者を受け入れている田村市を視察した。

28 日の日曜日は田村市に伝わっている“お人形様”の衣替えの日であるというので見物に行った。お会いしたお人形様は田村市の屋形、朴橋、堀越の、3カ所のお人形である。現存する人形様はこの3つであり屋形と朴橋のものは田村市の指定有形文化財となっている。往時は磐城街道の「五人形様」と呼ばれ、五カ所にあったという。

何の事前知識も持たずに、いきなりのお人形様の衣替え見物である。長年田村市に伝わる“祭り”の一つなのではないか思っていたが、それはどうやらハズレ。祭りと言えども目を見張らせるお飾り、鐘や太鼓に笛の音、臭いただよう屋台とその味わい、そして若衆の走りまわる熱気とが重なり合って、目眩を起こさせる空間演出がつきものなのだが……。どうやらお人形様の衣替えは、その筋のものではないようだ。

田村市の観光課の吉田典良課長さんは、休日返上で我々のお人形様衣替え見物に同行し、丁寧に説明してくれた。吉田さんの説明資料によると「地域の守り神、魔除けの神様として、背丈約 4メートルのお人形様を祀って約 450年も経たという。伝承によれば、悪疫が流行し、その苦しみから逃れるため、悪魔を追い払うという素朴な祈りからお人形様を祀ったとある。

村への災いが侵入するのを防ぐ神としても信仰を集めていたようだ。

なるほど、お人形様の姿を見ると饜ける。顔は強面のお面（木製）で周囲にニラミを利かせ、藁で出来た腕を左右いっぱいに拡げてトウセンボをしている。衣替えはお面の目、まゆ、鼻、口を色付し化粧直しをする。頭には深

い緑の杉の葉が付いた枝をタテガミのように付け、顔のまわりに、杉の葉のヒゲをわんさと付ける。体は柱を組んで藁や、ムシロで作る。屋形のお人形様は、伸びた腕に薙刀や刀を用意している。この衣替えの作業は毎年、地元のお人形様保存会の方々が繰り返しているという。見物をしていて不思議に思えたのは、見物客が我々以外にほとんどいなかったコトである。何故だろう？ モッタイナイ……。衣替えの

日と祭礼の日とが異なっているからなのか？祭礼の日には、地元の子供達も参加する行事もあるようだが。

いずれにせよ3つのお人形様は街道脇の一段と高い場所に陣取って、悪霊に対峙し続けている。その土着性、歴史性、そして、地元民の日頃のかかわり方などなど、立派なパブリック・アートに直面出来た思いである。祭礼の日には再びお人形様に会いに行けなかった事は残念だが。



堀越のお人形様



朴橋のお人形様



屋形のお人形様



なんと華やいだ日であろうか。風は肌寒いものの、陽光は暖かく、桜の雲は未だたなびいて、山吹やタンポポの黄色や芽吹きかけた若葉の緑、ムスカリらしき紫、カナメモチの紅色、なだらかな丘陵地に広がる里山は豊かな自然を満喫している。その中に、田植えに備えて水の張られた水田や親戚の数ほどに飾りたてられた鯉のぼりが、人々の営みを映して微笑しい。

福島には、「お人形様」のお召し替えを視察するために訪れた。「お人形様」は200年以前より街道沿いの地域の守り神として継承されていたもので、田村市には3体が現存する。編み藁の胴体、杉の枝葉の髪と髭、顔は弁柄や胡粉、墨で表情をつくる。目や歯に金を入れアクセントにするのも洒落ている。里山の風土の中に、地場の材料と地縁

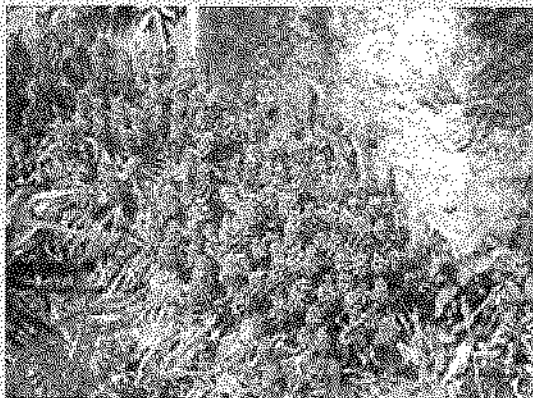
のコミュニティが作り上げる造形。エコ+アートというテーマに良い題材となりそうだ。

少子化や地縁社会の希薄化で存続にも懸念があるそうだが、今ある風景が続く限り、まだまだ存続されるであろう造形のエネルギーを感じる事ができる。

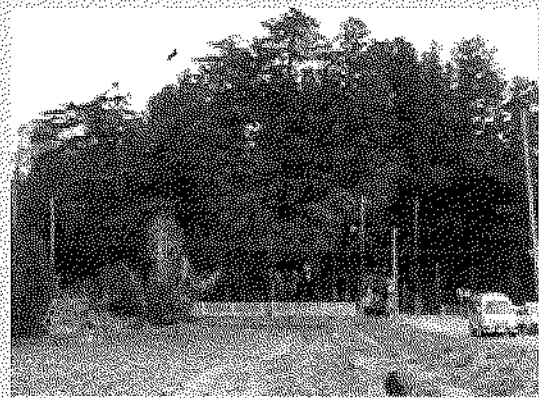
田村市富塚市長にお話を伺った。東日本大震災に際し、原発からの避難民受け入れに関する対応、除染の現状、中央官庁の画一的な施策、風評被害を助長する不用意な報道など、そして今なお残り、さらに続いていくことになると思われる仮設避難住宅。原発の災禍がなければ、この風光明媚な土地に残るはずもない震災の現実を知ることになる。震災前から指摘されていた原

発被災時の対策マニュアル(緊急対応、ハザードマップや避難計画など)の不備が現実のものとなったとき、「想定外」を「思考外」としてきた技術立国、我が国のテクノクラートの不明と罪深さを今さらながらに考える。技術は人を幸福にする、しかしそれ以前に、技術は人を不幸にしてはならない、という前提があるべきであった。

里山は、春うららで華やいで暖かく、風土の風習が継続されていく。しかし、3・11以降、いやそれ以前からであったのかもしれないが、文明の影が潜在していたのだ。



堀越のお人形様



朴橋お人形様





初春の千本桜に導かれ春風は激しいとはいえ陽射しは心地よく東北の限りなき平和な光景の中にいた。ここが原発の被災地である事を意識しなければ忘れてしまいそうな穏やかな福島県田村市の4月27日。

この穏やかな光景の陰に、岩手県、宮城県の自殺者は昨年と同じだが何故か福島県のみが1.4倍となっている。私達の国では明治以前、神仏は同じ場所に祀られていた。そのご神体である“おやま”や禊ぎの海が放射能に犯されてしまった・・・私達はその豊かな自然と民俗の喪失に心を痛めている。

年中行事“お人形さま”と“原発の被災地”視察の二日間に二度、ベビーベッドに、突然ヘビが飛び込んできたようなオドロキが、私の被災への鈍感さと認識不足から訪れた。

■難民

一つ目は視察の送迎を手伝って頂いた、家族三代の中心にいても若々しいA子さんの語った事。

3.11の当日揺れは強烈で、瓦は崩れ土壁が落ちガス、電気、テレビは切れ

情報も遮断されたが家族全員の無事を確認し取りあえず落ち着く。夕刻コンビニに買い物に出るとココニハ驚きの光景が・・・フロントガラスの割れた車、荷物満載の車が原発事故の海の方角から見渡す限り連なり渋滞している。このただならぬ様を前に、初めてたゞ事でなく先の見えない恐怖感がこみ上げる。

30キロ離れた原発は彼女にとって日常からは遠く、そのニュースを聞いてもこれ迄は他人事だったと云う。この時点を境に、農機具に拡散していたガソリンを集め、集落間の協議も無く、それぞれの家族全員が慌ただしく頼れる親戚への逃避行が始まる。その時難民の悲惨さを初めて理解したと語った。

私は戦争映画でしか難民の光景は知りませんが・・・原発は難民を作り、そしてその光景を私は心に強く描き刻む。

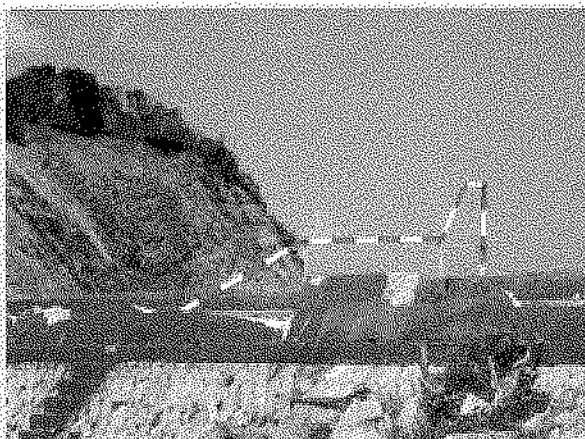
更に語ったA子さんの話には言葉を失う。各地に避難した多くの福島ナンバーの車は放射能をまき散らしていると言う事か！棒で叩かれ、パンクさせられ、A子さんの車両も傷を付けられた。ディズニーランドでは福島ナンバ

一の被害があまりに多いので専用の駐車場を設置した。そのトラウマから現在でも田村市から一步も外に出る事が出来なくなった友人もいると云う。

■久之浜・大久地区まちづくりサポートチーム

二つ目は建築家栗田さんがサポートしている、第一原子力発電所から30km南に下がる久之浜のプロジェクト風景です。

全てが津波に流され、一見造成前の埋め立て地風景、そこに何事もなかったかの如く飄々と秋葉神社が佇む。そして一艘の漁船さえ見えない不可解な海。穏やかな海岸から陸地に向かって深紅に塗布された棒板が5m位の高さに設置(写真下)、左側は足場パイプで神社の左右約250mの位置に設置されている。この深紅の板の高さが行政の計画している埋め立ての地上面だと云う。この高さに土を盛った場合、全てぎりぎり無事だった多くの神社が土の下に埋まってしまう。実際の埋め立てた時点での高さを村民に示し、神輿を共に背負い、言祝ぎ、浜の方々と話し合い



秋葉神社



埋め立ての地上面

討議する、ほとんどボランティアといえる 30~40 代中心のプロジェクトのプロセスに深い感謝の念を覚えた。

#### ■お人形さま

神像を人の形に造形することを好まない日本の文化風土ですが何故か東北地方から中部、関東の一部にかけて一群の常設の藁人形（神送り人形）が分布している。殆どの日本の年中行事に登場する藁人形は行事の度に造られ村人に関わる、疫病、害虫、風雨、泥棒

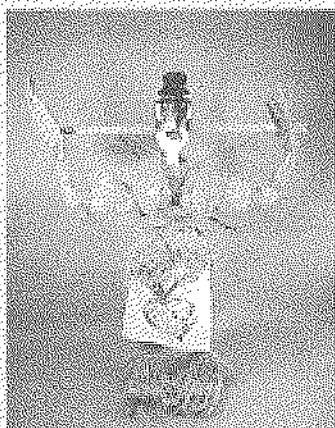
等の災厄をそれに託し、焼いたり、川等に流したりする。しかし此処一群の藁人形は村の境や辻等の要所に立ち続け災厄の侵入から村民を守る神（境の神）として祀られてきた。このような特殊な神力の行使は村人の災厄や穢れが藁人形に集積され、それが転化し大きな力となり外界からの災厄に対しても強烈な威力を発揮するようになったとも言われる。

原発の放射能汚染が周辺の市町村より風向き等によって比較的少なかった

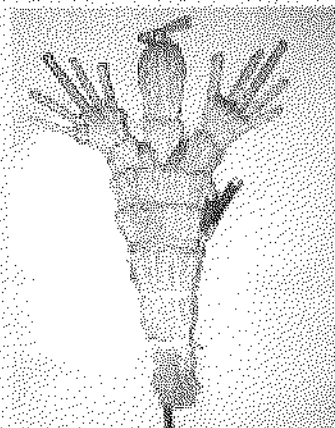
のはお人形さまの神力があったからかもしれません。

“お人形さまの衣替え”の“おこない”は田村市の各所で村の長老や青年団により何事もなかったかのように穏やかに数日後の祭礼まで執り行われる。この様子から、共同体としての村の力、人と自然の間を調停する年中行事の力が原発や津波の被災からの地域の新たな復興の基盤を成すように思えました。

### 東北 越後 関東 に見られる一群の藁人形※



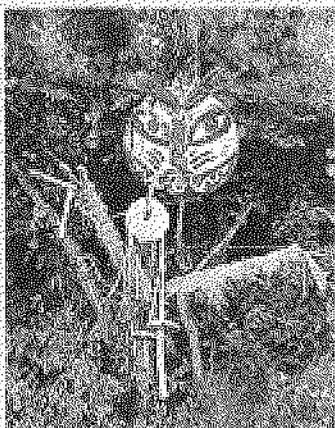
(1)  
シンショサマ  
H1130  
秋田県田代町山田



(2)  
ダイクサン  
H1540  
越後安塚町菅沼



(3)  
ショウキサマ  
H2400  
越後津川町大牧



(4)  
カセツクロサマ  
H1000  
福島県浅川町福貞



(5)  
カシマサマ  
H2500  
秋田県大森町末

## 圖結

阿部文殊菩薩堂の神官でもあった田村市市長 富塚有暉氏は私達を防災服で迎え、5分予定の挨拶が約一時間・・・直立の姿勢で、20km圏と30km圏にまたがり内陸部被災地特有の除染問題、原発事故による様々な歪み、課題を話された。そして最後に被災地行政の困難な舵取りを推察出来ない、大手新聞の記事や議員への不信感を語る、果敢で誠実な人柄に引きつけられた。

例年なら賑わいの春、誰も来ない閑散とした観光地に私達がお訪ねしたことを真心から喜び、休日を返上しての市職員に被災地、観光地と案内をして頂いた。

被災していない私達にとり、その荷の重さ、辛さは理解できないとしても、まずはお訪ねしてその良き風景に浸る

のもよし、野原一面に置かれたビニール袋に詰められた汚染土を見るもよし、その過程の内にこそ、お互いをあたかい方向に導く力がある。科学が人の五感を越えてしまった事、セシウムもプルトニウムも、人の感覚では認識不可能で大地との自然な調停が閉ざされてしまった事の恐ろしさを再認識せられた。生産と自然の融合した里山風景、稲穂の国の芸術品と言える水田に黒く光るビニール袋が果てしなく積まれた様は私を悶いつめる。日本の文化の本質は人と自然との調停―共生にあったのではなかったか。

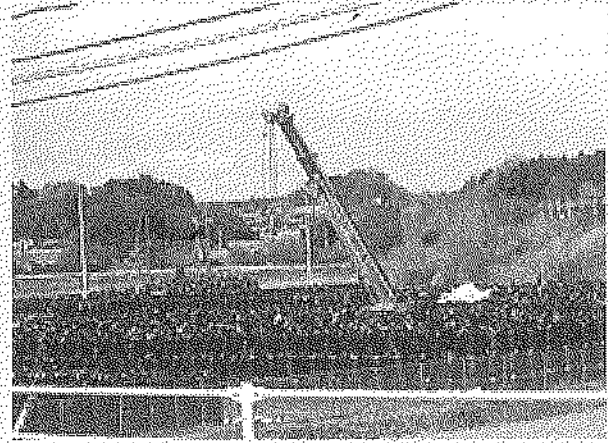
列島約1万2千年営々と熟成してきた風土、文化をわずか100年で破壊してきた経済及び設計の活動が、私自身の創作活動を含め裁かれている。

### ※写真及び参考文献

- (1)越後の人形道祖神  
(柏崎市立博物館発行)
- (2)あるくみる きく・わら人形を訪ねて (神野喜治著祭り)
- (3)火とまつり  
(岩手県立博物館発行)
- (4)境の神 嵐の神  
(福島県立博物館発行)
- (5)紀行を旅する  
(加藤秀俊著)



田村市市長 富塚有暉氏



除染・ビニール袋

2013年5月27～28日の二日間、今回の震災発生から現在に至るまで、最も復旧が遅れ、地域的なダメージが大きいと思われる福島県南部取材する事となりました。

福島第一原子力発電所周辺部である、福島県いわき市並びに中通側に隣接する田村市を訪れ、地域の人々がどのような影響を受けているのか？建築家の復興へのアプローチは始まっているのか？等々、私達は、私達の視点で今回の出来事を捉えてみようと考えたのです。

第一原発南側に位置する楡葉町は、現在でも避難指示解除準備区域に指定されている町で、警察の検問や走行している車両の少なさからも、異様な緊張感を感じました。

また、隣接する久之浜・大久地域では、死者行方不明者66名を数え、45%の家屋が全壊する大惨事となったそうで、地震、地盤沈下、津波、火災に加え、原発炉心の重大損傷事故、放射能汚染へと、次々に大変な目にあわされた地域でもあります。

第一原発の廃炉計画は、最低でも40年以上はかかると云われ、原子炉(特に1～3号炉)はどうやらメルトダウンで原子炉に加え格納容器自体も破れてしまい、推定40万トン/日の地下水が汚染されていると云う始末…陸側に井戸を掘って地下水を吸い上げ、バイパス排水をしようと計画されているそうですが、排水にナーバスな地元漁



業者達の反対と、地下水の水位が下がりすぎると今度は原子炉側から汚染水が山側に逆流する可能性もあるそうで、思うように進んでいないともいいます。

頼みの汚染水浄化装置“ALPS”も技術的に除去できない核物質は残ると云う事と、相次ぐ漏水騒動で苦境に立たされています。

また、近隣の農地などの土壌除染については、ゼオライトを改良した様々な方法が試され、少なからず効果をあげ始めていると云う話もあります。

農作物も当然『数十年は生産できる状態には無い』と思われていただけに、日本の科学技術の進歩には不可能を可能にする…という意味で、大変勇気づけられる速度を示しています。

現地を見てこの様な大惨事に際し、心を痛めている一人として改めて思った事は、様々な安全対策が取られ、科

学技術の粋を集め建設された管の数々のインフラや原子力発電所も、巨大地震や津波という大自然の圧倒的な力の前では脆くも崩れさり、自然には人智を超えてしまう様なパワーがまだまだ秘められていると云う事を改めて認めなければ為らないということです。

加えて、どんなに絶望的、悲観的状況に際しても、決して屈せず諦めず、地域に生活を続ける人々や、何とかして見せるという技術者、研究者達の気概は未だに沢山残っているという発見もありました。(まさに是こそが、脈々と自然と向き合い、畏敬し、戦ってきた日本人の本質であり文化なのかもしれません。)

…我々は改めて自然に対し深々と謙虚な考えを持つべきではないのか？

来年にも再稼働が決まった原子炉がいよいよ動き出すのです。

福島県中通り地方の過半を占める田村市を中心に、原発事故被災の影を引く現地を理解すること、一方被災を超えて、催事を変わりなく引き継がれる生活文化に接すること、表裏にある現況を知る貴重な訪問であった。

■美しく山河あり

20年前、国交省系機関の主催による、“まちづくり設計競技”の対象地域が、その年は福島県三春町に指定された。現地調査に訪れたこの地は里山、谷戸地が秋の風情を織りなして美しく魅了されたものである。今回は季節を春に移しての再訪であった。阿武隈山系高地の田村市は五月の連休に差し掛かって肌寒い、しかし早春の趣があつて桜、梅、桃が一齐に花をつけて、まさに三春の地名に因んでの風景であった。この日は中通りをいわき市へ、そして浜通りを北上し第一原発から20キロ、第二原発の最寄り迄の行程である。田村市の高地を降っていわき市へ向かう道中、地蔵堂を抱えて立つ“小澤の桜”、夏井川沿いに絢爛と咲く“千本桜”を見て、次第に早春から春の装いを色濃くする風景は美しい。

しかしいわき市へ向かうこの磐城街道は未だ春が見えない原発事故の被災区域へ、40キロ～20キロ、ギリッと距離を縮める道行きである。

■春は未だき

遡るが3・11震災から4カ月後、機会を得て同じ福島県、相馬から南相馬を訪ねた。相馬では一週間後に控えた野間追ひ祭りの準備に追われて少し華やいで見えた。しかし野間追ひ祭りの挙行については手練れの騎馬手や馬を失い、千年欠かさず続く祭りの存続を危ぶむ声をマスコミが取り上げていたが、地元の強い意思によって相馬、南相馬地域の三社合同祭を相馬の中村社

のみで決行するに至ったという。震災を免れて厩舎に集められた馬が蹄を立って苛立ち、怯える様子が未だに臉から離れない。日本百景に数えられたという松川浦の凄惨な状況を視て南相馬



小澤の桜



立ち入り禁止地区



秋葉神社

に向かったが、途中マグネチュード7の余震に襲われ、荒野に繰り返される津波警報に踝を返して原ノ町庁舎に避難した。瞬時味わった恐怖も3.11の震災に遭った地元の方たちのそれに比べれば幾許のものであろうか。

そして今回、原発事故による避難区域を挟む常磐線の不通区間、原ノ町～広野間の一方、広野への訪問であった。

“ここからは立ち入り禁止”の看板の前に降り立つ。除染作業車を除いて一般車の行き来は無く、不測の事態に備えて待機する警察の装甲車が物々しい。周辺は除染土を収容した夥しい数の黒いビニール袋が行き場なく積み上げられている。

余談であるが第一原発の直ぐ最寄り、浪江町に停年退職後の人生を農業に賭して土地を求めた親しい友人がいる。しかし原発事故で避難を余儀なくされ、傷心の内に友人は東京の生活に戻った。農地の中央を沢が走り美しい山野にあった。耕作の助人として私も喜んで何度か駆り出された、しかし今、彼の悲しみを思うと不毛な想い出でしかない。

今回のツアーにご一緒した、建築家・栗田祥弘さんの案内によっていわき市、久ノ浜へ。

栗田さんは「久ノ浜大久地区街づくりサポートセンター代表」として久ノ浜の復興に東京と行き来して尽力されている方である。久ノ浜は震災、津波、さらに直後の火災に見舞われ、荒涼とした廢墟に点在する焼けぼっ杭が痛々しい。スーパー防潮堤の高さの目安となる断面表示がモックアップされてある。高さ7m。昨年夏、aaca 調査研究（委）で宮城県亘理、関上を訪問した折に、案内をいただいた建築家・氏家清一氏や柳沢陽子氏も防潮堤の是非を問題にされていた。海の風景を失った風土に果たして地元の方々が戻って来られるのか、美しい海浜に拠ってきた観光が失われるのではないかと、国の施策と地元思いとの乖離が続く。東北から関東まで、沿海地域の神社が津波の浸水限界域に防災配列されている事があらためて話題になっている。繰り返されてきた津波に苦しむ先人たちの経験的な知恵である。

ここ久ノ浜でも周辺の多くの神社が津波を免れている。驚くべきことは周辺のみならず海から幾百米もない秋義神社が津波と火事から逃れてポツンと廃墟の中に損傷なく立っていた。これも潮路を知りつくした先人の知恵であったのであろう。浅間神社が富士の噴火を鎮める役割のように神社は災害と密接に関係している。久ノ浜周辺の神社も山の神、海の神、火の神、様々に守り神としての役割を担っている。栗田氏は町おこしの一環として、それぞれの神社から神輿を一斉に繰り出して、合同神幸祭を数日後に執り行うそうである。町おこしに魂を呼び戻し、復興へ意気を上げようと言うのである。

#### ■沖合に漁船の一隻の影もない

福島県下でも有数の漁港であった久ノ浜は風評被害を懸念して漁場の水揚げを控えているとのことである。翌日、私達を迎えていただいた富塚田村市長の談話にも、地元をあげて復興に取り組む中、風評被害の妨げを切々と訴えられた。報道のあり方や一般者の理解を強く求められた。“新聞は事件を報道するが日常は報道しないため、しばしば事実は反転する”と述懐したのは新聞記者出身の司馬遼太郎であったと思うが、私達も注意深く被災地の情報を咀嚼したいものである。

今回のツアーの一方の趣意は催事や行事を通して田村市の生活文化に触れることにある。富塚市長から手渡された「たむら 宝さがし」(冊子)を手に文化財視察へ繰り出した。

#### ■人の営みに文化あり

○まずは“お人形様の衣替え”である。磐城街道沿いに現在三体が習俗として残っている。

お人形様と言うからには桃の節句か丹後の節句に因んで優しいものを想像したがあに諮らん、悪霊をガッと睨みつける4mを超える威風堂々たる強面の鬼姿であった。2m角ほどの朴の木をくりぬいた鬼面、鬚髯が杉の葉、手



お人形様(男の力仕事)



編を織るのは女の仕事



久延毘古神

足・胸部は薫で繕って右手に刀、左手に長刀をもつ立ち姿である。毎年の衣替えとは面部を外して顔料をやり替え、髪髻を新しい杉の葉に化粧直しする、これは力仕事、男の仕事である。手足・胸部を薫で繕ってつくるのは女仕事、現地に寄り合ってほぼ一日仕事、終わって皆さんは円座になってお神酒で労う。結いの精神そのものである。このお人形様を言うのであろう、幟に“久延毘古神”とある。国立民博の学芸員の友人に問い合わせをしたところ、この神様、古事記に因んで出雲の国づくりに一役買った神様で、歩行をせず居ながらにして森羅万象の悉くを知り、悪霊や悪疫を寄せ付けぬ怖い神様だという。別名は田畑に立って侵入者に睨みを利かせる、なんとあの桑山子である。お人形様は桑山子の原点だろうとのことであった。

○文化に歴史はつきもの、仙台平に大多鬼丸の首塚がある。阿武隈山系を背景にすくっと勇士の像が立つが、坂田田村麻呂が征夷大將軍の命を受けて蝦夷征討の途上、これを迎え撃った当地の豪族、大多鬼丸との合戦に拠ったものという。勝利した田村麻呂は大多鬼丸の地元からの信望と戦での勇敢さを讃えて首塚を造って弔った伝承に拠るといふ。田村麻呂はいずれ多賀城から胆沢の城へ歩を進めるのであろうが、私達にとって奈良・京都を中心にした西の歴史には明るいが北の歴史については十分な知識を持たない。中央では知られざる、地方に息づく歴史とロマンがある。

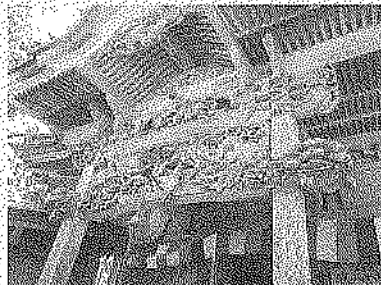
○全国5大文殊堂の一つと云われる安倍の文殊堂。開基の由来が安倍貞任に因むと言うから随分古い。文殊堂と言えば学問の仏、400年を超える杉並木が鬱蒼とするこんな山地に何故？と思うが、江戸末期、佐久間磨軒という和算の大家があつて2000名の門弟を抱え御堂で教育していたと言う。ここには日本最大の“算額”幅5メートル、高さ1メートル、がある。算額とは算術が解けると神社にその解答を奉納する



勇士の像



首塚巨石



文殊堂



文殊堂の樹齢400年の杉

ものを言うそうであるが、全国、津々浦々にまでこの習慣がある。福島県は全国一に算額が多い地方なのだそうである。その数103件という。17世紀末に既に西欧に先駆けて微積分の算法を見つけた関孝和が著名だが、幕末に向かうその後100年を経て各地方に和算

が伝播されていたのには驚きである。

明治になって日本が急激な欧米の合理主義にいち早く馴染んだ背景に和算の普及があつたと言われる。古い小さな堂宇だが虹梁にある透し彫りのたしかさにも驚かされた。江戸末期の名工である伊東光運の作だとある。蛇足になるが、以前、魚沼の西福寺の開山堂を訪ねる機会があつた。石川靈蝶なる彫刻師がいて、開山堂の欄間、天井を埋め尽くす彫刻、工芸の力量に圧倒されたものである。先般 aaca フォーラムで“隠れた仏たち”と題し講師の写真家、藤森武氏が東北の仏像、神像を数多く紹介されたが、古いものは奈良時代に遡り、中央から離れて東北ならではの個性と表現が見て取れる、東北各地に文化財が横溢にあることに不勉強とはいえないに驚かされた。

文殊堂では数日後に催される“例大祭”——平安の装束を纏っての稚児行列、に児童の皆さんが賑やかにリハーサル中であつた。お人形の衣替えといい、例大祭といい、必ずしも中央まで広報が行き届かない。しかし何百年の間、継承されている文化に、時間のしたたかと人の営みのたしかさを観て安堵したのである。

企画していただいた、aaca 情報文化(委)、田村市文化伝道師・吉野よし子さんや現況を忌憚なくお話しいただいたとみ富塚塚原田村市長、ご案内いただいた各方面の皆様方へ謝意を表します。

■集落の祈り

シャン、シャン…涼やかに鈴を鳴らして少女たちが舞う。口元を堅く結び、真剣な面持ちで檜扇を押し戴く。

ここは田村市船引町堀越にある明石神社の境内。ぎこちなさを残しながらも一心に舞っている4人は5年生、揃えた膝に手を置き、頬を染めて歌っている2人は4年生。5月の例大祭に向かって巫女神楽の練習中だった。

今回私たちは、磐城街道(三春町～いわき市)の3カ所に、今なお伝えられている「お人形様」に会いにきた。明石神社の境内、少女たちの練習場所のすぐ近くで、「堀越」のお人形様は衣替えが始まったところだった。

お人形様がいつ頃から祀られているのかは定かではないそうだが、年に1度「お衣替え」が行われるという。ちょうど私たちが到着した時には、1年経って茶色になった杉の枝葉が取り払われ、頭には竹籠が残っていた。それでも威風堂々とした姿に感嘆の声が上がる。衣替えに使われるために集められた杉葉はツヤツヤと香り立ち深緑で美しい。集落の人々は慣れた手つきで次々にお人形様を甦らせていく。

他の2カ所とは違って堀越には保存会がない。明石神社の総代4人と行政区長4人の計8人が主になって衣替えが行われている。ちなみに神社は隣の宮司が兼務で守られており、総代も4年で変わるそうだ。

「屋形」のお人形様も衣替えの真っ最中。装束になる藁を編むのも縄をなうのも保存会の人たち。黙々と作業が行われ、衣替えの後は満開の桜の下で苦勞様会。「朴橋」のお人形様は既に衣替えは済んで、髪も髭も青々と若々しく私たちを迎えてくれた。

3カ所を巡ってみると、それぞれ表情に違いがあり興味深い。共通していたのは、両手を掲げ睨みを効かせて集



巫女神楽

落を守っているのに、「さあ、おいで」と迎え入れてくれる温かさをも感じたことだった。寿ぎは招き入れ、悪魔は退ける。親が子を守るように、お人形様たちは集落を守っている。それは集落の人々の祈りの形。

■受け継ぐ若人たち

お人形様を訪ねた前日に、私たちは田村市からいわき市久之浜に向かった。今回の旅の目的のひとつに「原発の被害状況の取材」があり、田村市からいわき市まで車で走る計画はしていたものの、当初、久之浜は予定に入っていな



衣替えの後満開の桜の下にて



かった。たまたま友人の若き建築家・栗田さんを旅に誘ったら、「田村の近く、いわきの久之浜に今います」と電話の向うの声。「まちづくりサポートをして週に1度は通っているの、良かったら案内します」との申し出を有難く受けたままであった。

ところが、何の予備知識もないまま現地に降り立った私たちが待っていたのは、目を疑う風景だった。ポツンと神社だけが立っている。震災後に津波が襲い、火事まで起きたと聞くその地に、建物の土台だけが並ぶ中、木造の小さな神社が海を向いて踏ん張っていた。秋葉神社(稲荷神社)だそうだ。

「地震がきたら秋葉さまへ逃げろ」。同じような言葉を石巻でも聞いた。「地震になったらおみょんつあん(お宮さん)にあがれ」。昔から氏子の間で伝えられてきたと、小さな社殿に250人もの人が逃げ込んで助かった石巻・明神社の宮司が語ってくれた。

いわき市久之浜・大久地区は、原発事故からおおよそ30km圏の海岸沿いで、一時は報道陣さえ来ない「報道されない被災地」だったそうだ。久之浜第一小学校は約220人の生徒がいたが、当然のことながら震災後は極端に生徒数が減った。久之浜も、周辺地域も、大震災から2年経っても手つかずの状態で

残されていた。しかし、親の反対を押し切ってでも久之浜で勉強したいと、多くの子どもたちが主張し、190人前後まで戻ったそうだ。

5月の神幸祭を前に、神社の意味を子どもたちや町の人々に伝えようと作ったと栗田さんが見せてくれたのは、モノクロ出力の中綴じもしていない薄っぺらな冊子だった。まちづくりサポートチームは栗田さんが共同代表を務める若者集団。その彼らが伝えようとしているのが神社と聞いて、意表を突かれた思いがした。開いて見て更に驚いた。なんと素直に神社の本質が語られているのだろう。しかも今風のセンスの良さで。

震災後も故郷に留まることを選んだ久之浜の子どもたち。その子どもたちに正面から向き合い、寄り添っているサポートチーム。3.11は、計らずも次の時代を担う若者たちを確実に育てている。

#### ■言挙げせぬ国の形

震災があった年、東北各地でいち早く、次々に年中行事や民俗芸能が復活されたと聞く。陸前高田の七夕、石巻の虎舞、相馬野馬追…と。一時は古くさいと疎まれ後継者不足が嘆かれたはずが、生活基盤を整えるだけでも大変な状況にありながら、復活した行事で多くの人たちが涙した。人々の心の拠

り所がそこにあったからだろう。

私たちの国、日本は「言挙げせぬ国」と言われてきた。言葉に表さず、形として、習わしとして、しきたりとして先人たちは祈りを伝えてきた。そして、その背後には地域の核となる神社があったことを3.11は再認識させてくれた。

久之浜のサポートチームが作った冊子を見て、『ぎんぎつね』(神社の跡取りの娘と神使・ぎんぎつねのお話し)というアニメーションを思い出した。海外で人気の日本のアニメーションに、ついに神社まで登場したかと思ってTVを見ると、放映が夜中にも関わらず意外にも密かなファンが大勢いるようだった。

しばらくは、西欧のARTばかりに目がいつていた時代が続いたが、今の若者たちは違うようだ。グローバルが当たり前になった世代は、いとも簡単に軽やかに国を超えていく。しかし、それだからこそお互いの文化に敏感だ。日本は八百万の神々のおわす国。DNAに刻まれたこの国の美を、文化として、まちづくりとして、形にしていく時が来ていることを、東北の旅は教えてくれた。



久之浜秋葉神社

東日本大震災による被害によってあたり一面に何もなくなってしまったなか「ぼつり」と、しかし「凜」とした雰囲気をもった神社が残っている。福島県いわき市久之浜(ひさのはま)に建つ稲荷神社である。

久之浜に震災後訪れると、誰もがこの景色に圧倒される。なぜ海岸線近くに建つあの華奢な木造の社だけが残っているのか？それを調べあげた方が久之浜・大久地区の地元にいる。吉田成志さんだ。吉田さんは福島県職員の傍らリサーチをおこない「津波遡上限界ラインには神社仏閣がある」というタイトルで講演もしている。

吉田さんの論によると、神社仏閣が津波にも関わらず残っているのは奇跡ではなく、かつてその場所で暮らしてきたご先祖様が神社仏閣を津波の来ない場所へ移転または土台補強をしてきたからだと言う。これは久之浜に限らず東北全体および関東その他でも見られる全国的な現象なのだそうだ。久之浜のケースは必然の風景が極めて象徴的に表れたものと言える。

私はこの久之浜とたまたま縁があり「久之浜大久地区まちづくりサポートチーム」としてまちづくりに関することをサポートしている。2013年に入ってから、久之浜第一小学校とコラボレーションして地域イベントと合わせてまちづくりワークショップや防災緑地ワークショップのサポートなどもさせて頂いている。

毎年久之浜では、5月の連休に合同神幸祭として町会ごとに神輿を一日中練りまわす。震災後、子供神輿を含めて神輿の担ぎ手が激減した関係で、どのようにまちの人々に神輿担ぎや祭などの文化に興味をもってもらえるのかと相談を受けた。

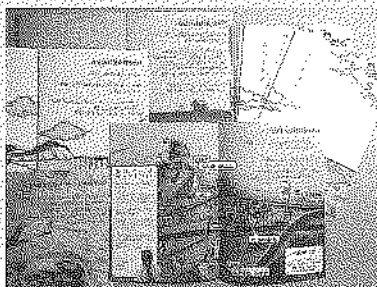
私たちが考えたのが「なぜ神社が必要なの？」(神輿は)なぜまちを練り歩



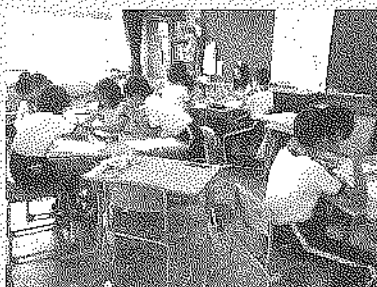
久之浜の稲荷神社



合同神幸祭



作成された小冊子



久之浜第一小学校

くの？」といったまちや行事に関する素朴な疑問に答えるような小冊子を作成することであった。極めて遠回しな方法だが、まちで行われる「祭」の意味が分かれば、祭自体に愛情が湧くかもしれないし、「まち」に対してプライドを持

つようになるかもしれない。そして冊子の後半では「なぜ神社は残ったの？」と続ける。

吉田さんが調べたように神社が残ったのは必然だったと考える。近代になり「まちづくり」や「都市計画」といった専門的で難しい言葉がよく使われるようになったが、その根源をたどっていく、やさしく表現し直すと、それらの言葉は「メッセージを未来へ残す方法」と置き換えられはしないだろう。

今までご先祖様から色々なメッセージを頂いてきた久之浜・大久地区の人たちが、東日本大震災を体験した今、50年後、100年後の町民に対してどのようなメッセージをまち全体を使って送ることが出来るかが試されている。この冊子は久之浜第一小学校の全生徒に配られた。

2013年の上半期を使って「久之浜地区防災緑地ワークショップ」が県主催で行われている。防災緑地の範囲内には実はこの稲荷神社が入っている。実は防災緑地のような公共の空間内に特定の宗教施設が入ることは法律で禁止されている。当初は神社を移転するしかないというムードだったが、久之浜の人々の強い思いでワークショップ内でも多くの議論が交わされた結果、都市計画変更をして神社敷地を防災緑地範囲外にする手続きをすることになった。つまりあの象徴的な稲荷神社を保存できる道筋がついたということである。一つの大きなメッセージを残せることになる。

小学校でも独自に防災緑地ワークショップを行っており、防災緑地範囲に津波で流された幼稚園の敷地に関して議論があがった。仮に堤防と緑地が出来たとしても、かつて幼稚園があったエリアは子供が遊べるような特殊な環境にして記憶を残したいといった提案が出た。これは大人のワークショップ

では出てこなかった。

防災緑地ワークショップなどの為に久之浜へ通い続ける中で、サポートチームメンバーの中から新しい企画も立ち上がった。久之浜の子供たちに夢を与えるような企画ができないか。そこで生まれたのが「HISANOHAMA COLLECTION」。子どもたちがおこなうファッションショーである。

9月1日と28日の2回に分けて行われた服づくりワークショップでは、サポートチームのお兄さんお姉さんのヘルプを受けながら、子どもたちが様々な素材からお気に入りを選んで服を作っていた。子供たちに服を作ってもらった時、一つだけ条件を付けた。必ず地元久之浜の風景写真を一枚選ぶことだ。久之浜のまちに愛情とプライドを持ってもらうことを目標に、自分の好きな久之浜の景色に合う服を作ってもらった。最初はシャイな子供たちだったが、物を作ること、デザインすることの楽しさをすぐに感じ取り、目を輝かせて時間が経つことを忘れて服づくりに取り掛かった。

そして本番のファッションショー。この1日の為に小学校の体育館を特設ステージとランウェイのあるファッションショー会場に一晚で作り上げた。いつも見慣れた場所が見たことの無い場所に变身したことに子どもたちのボルテージは一気に上がった。ステージ裏で自分でデザインした服に着替え、化粧をしてもらい、ランウェイを歩く練習をした。DJが音楽をかけ、MCが子供たちの名前を呼ぶと、舞台正面に写っている自分で選んだ久之浜の景色にその子のシルエットが浮かび上がる。シルエット上でポーズを一回決めたと正面スクリーンを突き破ってステージ上に登場。まちの人たちが見守るなか、久之浜の子供たちが楽しそうに手を振りながらランウェイを歩き、ポーズを決めていった。

全ての発表が終わった後の子どもたちの言葉にうれしさがこみ上げてきた。「次はいつ来てくれるの？明日？」

まだまちの復興には時間がかかりそうだが、久之浜・大久地区が前進しているのを感じる機会が増えてきたように感じる。



HISANOHAMA COLLECTIONのポスターと会場風景



お人形さまを訪ねて



石ノ森萬画館を訪ねて

aaca

2013年12月4日発行

取材記事執筆/撮影/編集: 調査研究委員会情報文化部会

発行者: 岡本賢

発行所: 一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館6F  
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598  
E-mail: info@aacajp.com